重要目次

一回

家庭雜誌

十五日
發行

第百拾六號

（前付の一）

塚越芳太郎著

熊澤蕃山

定價八十錢　郵税八錢

●●●東京日々新聞　同編五百六十餘頁字數無量十八萬其勞や大なりと云ふべし

●●●東京經濟雜誌　學者としての熊澤蕃山政治家としての熊澤蕃山描き出して餘蘊なし

●●●讀賣新聞　五百餘頁の大冊、或は政治家として論評し或は學者として論評し遺事殘業一も漏すなくして俊傑了介熊澤蕃山を表彰したるものは此書也熊澤子の相貌髣髴として現はれ來り不知の裡に益を受くるもの尠とせず是れ本書の本領

●●●山陽新報　五百六十餘面の大冊子にして蕃山の一生を寫し出して餘蘊なし著者は塚越停春氏にして幾多の材料を收集したるの勞力も亦た太だ多とするに足るものあり要するに片々たる近日の傳紀物中傑出の著述なるべし

●●●大阪每日新聞　著者此多興多趣ある一人物を捕來りて題目となし其如何に生れ如何に生活し如何に働きしかを語る甚だ詳細綿密、紙數六百弱頁に渉り其考證の行屆き、引用の該博なるは蓋し近者汗牛啻ならざる傳記中の錚々たるものなるべし挿圖あり、眞蹟の寫あり

●●●早稻田文學評　「承應寬文の日本」、「熊澤蕃山」、「政治家としての蕃山」、「學者としての蕃山」等の章を設け、細所大所洩らすところなく此の偉人の面目を彷彿せんとせし著者の苦心また多とすべきなり、文章は例の如く華やかにして流暢讀みて倦ましめず、

乾坤一布衣著

社會百方面

定價十五錢　郵税四錢

少年傳記叢書號外

横井小楠文

定價十二錢　郵税二錢

正岡子規閲並序　下村爲山挿畫

新俳句

定價卅五錢　郵税六錢

●●●東京朝日評　此書は日本派諸子の俳句を三川碧玲瓏の兩氏が集輯せるにて三文の買値なき舊來の俗俳壇を離れ別に新生面を開けるものなり……其想と調子に於ては即ち優に今代の俳句たるべき特色を失はず……新俳句の新俳句たる新面目を具したるものなり吾人は此新犬筑波の發刊を喜ぶ

●●●日本評　新俳句集は明治中興の新短詩を蒐集せしもの實に新派俳句の第一集なり之れを編せるの人碧玲瓏等皆素養あるのみならず子規等亦大に力を之れに致せしものあれば其書の普通出來星の比にあらざるや論なし後日の明治俳諧史の好材たるは勿論所謂明治俳諧の眞味を知らんと欲せば此書如き必らず一度の研究を要すべし

稻垣滿次郎述

外交と外征

定價十五錢　郵税四錢

竹越與三郎著

支那論

定價十錢　郵税二錢

菊池長風著　柴四朗德富猪一郎序

朝鮮王國

定價五十錢　郵税八錢

德富猪一郎深井英五合著

歐洲大勢三論

定價十五錢　郵税四錢

民友社編纂

已成西比利亞鐵道

定價十二錢　郵税二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

江戸と東京

定價十錢　郵稅二錢

本書は奠都祭紀念として發兌す。書中掲ぐる所ろ江戸城の起原より德川時代江戸市中の風俗習慣民種市劇祭禮冠婚年中行事等細大漏さず加ふるに勝海舟伯の談にかゝる江戸城受渡之實話を以てす、行文平易、振假名付、極美製小册子にして一讀三十年前より三百年前に至る江戸の面目活如として躍出するの感あるべし。

發行所　東京々橋區日吉町　民友社

合本出來廣告

國民之友合本 第廿一卷

自明治三十年七月至同年十二月

定價金壹圓　郵稅（目方三百四十匁）

家庭雜誌合本 第拾卷

自明治三十年七月至同年十二月

定價金七十錢　郵稅金十四錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

豫告!!

森田文藏遺著

ユーゴー小品

印刷中

發行所　東京日吉町　民友社

速記法 自宅獨習生募集

月謝二十錢　二ヶ月卒業

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地

速記學專修所

家庭雜誌

定價表

	（前金）	（市外郵稅共）
一冊……	拾錢	拾一錢
六冊……	五拾七錢	六拾三錢
十二冊……	壹圓八錢	壹圓二拾錢

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌 毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

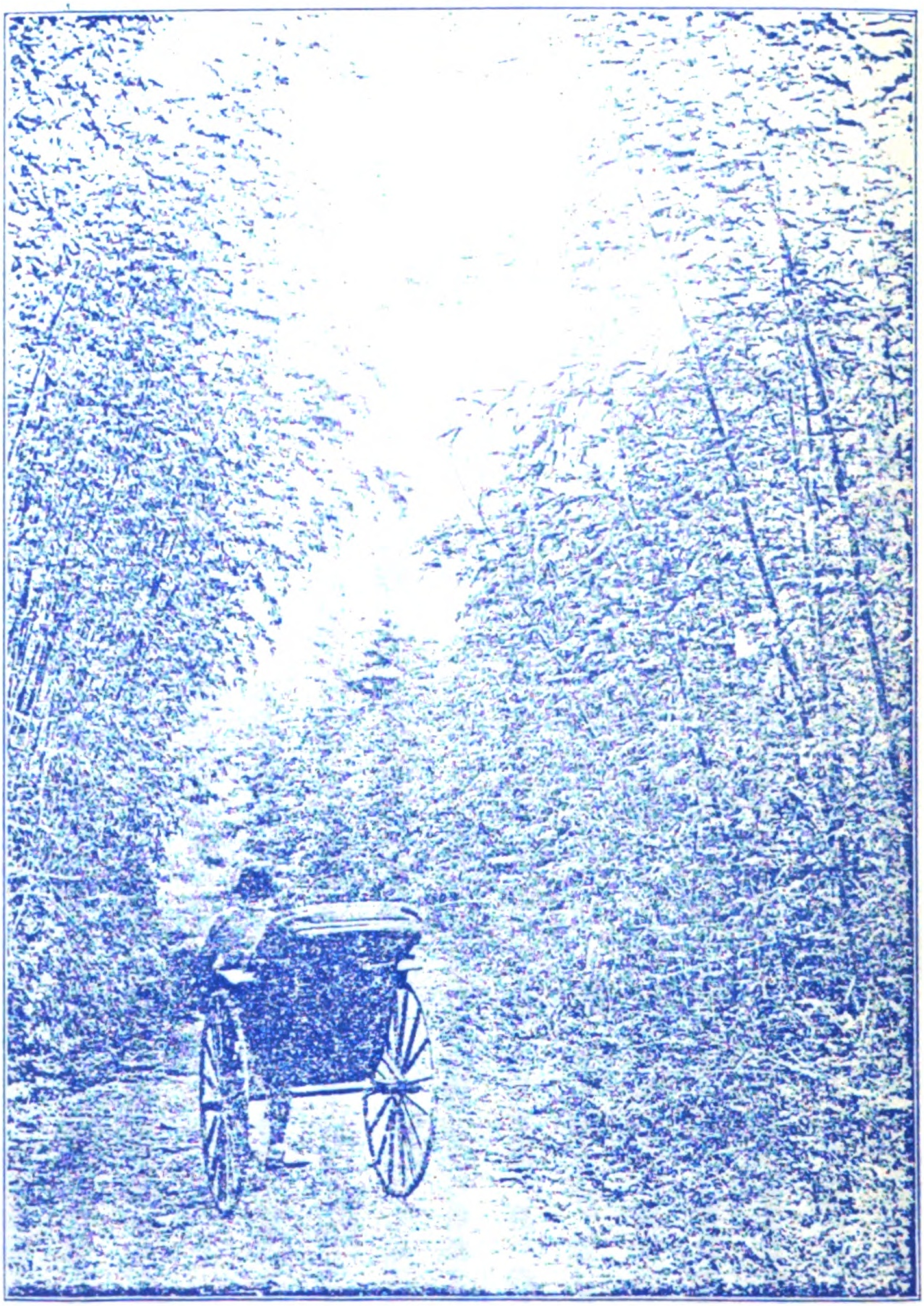
發行兼印刷人　吉崎圓吉　編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十一年五月十五日發行

家庭雜誌第百拾六號

目錄



小川一眞製

緑陰清風

家庭雜誌第百十六號
(明治三十一年五月十五日發兌)

社說

母親の心得

家の運命と國の運命

蘇峰生

一國の運命が、母親によりて支配せらるゝは、尙ほ一家の運命が、母親によりて支配せらるゝが如し。母の子を敎ゆるの仕方如何によりて、其の家が或は榮へ、或は衰ふるなり。而して家が積れは、國となるが故に、其の國も亦た自から然るなり。

且つ母の子を養ひ育つるの仕方如何によりて、其の子の氣象、精神、性情等に大ひなる關係を及ぼし、それが積もり積もりて、遂ひに一國の元氣ともなるぞかし。昔スパルタ國の母は、其の子の軍の門出を祝ふて、楯を銜ひて戰へ、左なくば楯に乘りて還れと勵ましぬ。スパルタ國の希臘列國の中に於て、武勇の秀でたるも、亦た此の母ありたるが爲めなりと知る可し。

我邦封建時代に於て、母親の子を敎育するや、實に嚴重なるものにておりき。決して詐りを言はぬ樣。他の子供と喧嘩して、泣ひて家に歸れば、武士の子が泣ひて歸るとはなしとて、痛く叱り懲らし。若し又た金錢の上に就ては、別して賤しくなき樣。且つ行儀を大切にし、人に對し、殊に尊長に對しての作法を愼しましめ。凡そ武士道の敎育は、母の手心一つにて行はれたりと云ふも過當にはあらざりき。乃ち一言にて云へば、封建の世の中は、武士の母たるものゝ力によりて維持せられたるぞかし。

今ま吾人は母の國の運命に、大關係ある一の證例を擧げむ。佛國は世界に勝れたる文明國にして、其の中分少きも、唯だ國民が外に出るとを好まぬ故に、折角政

治の上に於ては、領地を擴げつゝも、其の殖民少く此れが爲めに其の隣國たる英吉利は、世界の隅々迄も、其の殖民地を有するに係らず、佛國は國の勢力に不似合にも、其の手が伸びぬなり。今ま其の理由を聞くに、佛國には親子の情愛洵に濃かに、特に母親が其の子を愛する厚くして、其の子を外に出すを好まざるが爲めなりと云ふものあり。

佛國の母親は、其子を唯だ己れが腰元に置き、日常相見て樂みとなす。されば其子の外國に行くは愚ろか、同じ佛國にありても、一の地方より他の地方に行くことすら、甚だ面倒なるぞかし。母親の目よりすれば、其の隣縣に移轉するすら、海上萬里東京へでも殖民するかの如く思ふなり。現に昨年佛國の某政治家が地中海を隔てたる向岸の大守に撰任せられたるに、母親の老ひたるが爲めとて、之を辭したる例もあるなり。而して佛人が結婚すれば、其の妻の父母たるものが、其の娘を遠く離すを好まず、愈々以て其の身躰は、其の土地に固着する樣に成り行くと云ふ。

英國の如きは、之に反し、其の母親たるものが、其の子の生長すれば、世界を股にかけて、自由に其の運命を求めしむるなり。記者が英國にありしや、其の寓居の娘は新婚して、南米のブラジルに行かんとしつゝありき。其の母は寡婦なれども、毫も掛念する所なきが如く見へにき。英國の世界に膨脹する所以、佛國の收縮する所以、其の理由は多けれども、其の重なる一は、母の心懸け如何によりて定まることと疑ふ可くもあらず。

今や我國は始めて世界の舞臺に上り、其の國の力を四方に伸ばさんとするに際し、我が國民をして英國の人民の如く、世界を家とするの氣象を生ぜしむ可き乎。將た佛國人民の如く、吾家を世界として、外に出づるを欲せざるの習慣を爲る可き乎。世の母親たるもの

の心得如何によりて、如何樣ともなる可きものなれば、此邊には呉々も注意あり度きものなり。

日記と手かくと

日々一家の中に起りし事どもを記し置くべき家乘日記の必要なるとは、本誌の屢述べしとなるが、良き事は繰り返しても、實行の普からむとこそ望ましけれ、今は印刷の事業日々に進歩して日記帳の如きもわざ〳〵作らざるも坊間の書店等に便利なる製本數多く賣るが故に、文字かく術を知らるゝ限の人々は大概はこれによりて日記を記し居らるべしと思へど、なほ其處に注意の至らぬ際もなしとはいふべからざればなり。

凡そ一家にして日記なきはなほ一國にして記錄無きにひとしく、一國の記錄なきは政治の綱領をみだし、一家の日記無きはやがて家政の亂雜をきたす、過ぎし事どもを記すは、將來の事をよくせむためなり、一國が歷史を作り歷史を記錄するは、また實にその國の將來の榮を得むがためにこそ、過ぎし事と行とに美事善行あらば、その榮を失はざらむとのために、さらに美事善行をつがむとすべく、過ぎし事と行とに過失あらばそれに鑑みて再びさる過失をかさねざらむとを思はむは人情の常なるべし。一國に歷史といふものありて、大切なる學問となり記錄となるゆゑはもとより深き種々の所由理窟はありとも、詮ずれば人が過去を省みて未來を愼み、過去の禍福を視て未來の幸福を得むがために外ならじ。之を約めて一家の上に及ぼし視ば日記は一家の記錄なり歷史なり、さては一家の幸福を得むための必要なるものと知り得べし。かく根源よりその必要はいふまでもなきとながら細かき點よりわれ等は女性に日記をすゝむ。

第一　手かく事のため。本居宣長いひけるは、よろづよりも手はよく書まほしきわざなり、歌よみ學問など

する人は殊に手あしくては心おとりせらるゝを、それ何かは苦しからんといふも(あれど)なほあかず、うちあはぬ心地すと、歌よみ學問する人はもとよりなれど、女子の手あしきはなか〳〵に見苦しきものなり、大かた男子は疎き處にその品格をそなへ、女子は細かき處に品性を見るべきものなれば、行儀作法などの女子に正しからねばならぬとひとしく、手かくことは品性の上にて第一美しからむやうありたし、手紙など美しく書かむは何事よりも女子の品性をそゆるものなり、顔よき女子にても手かくこと拙きためにむげに品格の見劣りせらるゝこと間々ある例なるを思ふべし、されば日毎に日記を記すに於ては自から手かくことに慣れ、慣るゝに伴れて、拙なきもやがて美しき筆の綾をしめすやうなるべし、字を習ふといふことは、世に出でゝ生活の業に從ひてよりはなか〳〵に行ひ難きものなれば、かくせむと俗に所謂習ふより慣れろといへるものにて、行ひ易き第一の習字法にてあるべし。手かくことはさるほどに用なきわざなどゝ思ふべからず、まことに手をよくかゝむことは、女子の品性を十段も二十段も美しくあらはすものなり。佐久間象山の女訓に、みめ形は生れつきなれば、よきもあしきも、換ふべきやうはあらねど、身のわざ心のたしなみは、その人の心にしたがひ、昔のかしこき人にもなほ及びぬべしとあり、手かくことは所謂女子たしなみの大切なるもの心がけ次第にて昔のたくみなる人にも及ぶことかなひ難きにあらずこれがためのみにても日記はかゝさず日々の課業として必ず記すべきことこそ望ましけれ。

その他交際のためにも兒童敎育のため勝手もとのため何とはなく必要はいふまでもなけれど、つとめてその日の出來事及びおのれが行ひし事、人のなせしこと、おのれが思ひつきしこと、漏れなく記しおかむこと必要なり。後に至りて如何ばかりの便宜と利益とをおのれに與へ家に與ふべきか計るべからず、日記を記せるによりて一家の災厄を免れ幸福を得し例もあるぞや。

論説

婦人の力

湖處子

愛情ほど深く人心に感化を及ぼすものはあらじ。富貴や、爵位は能く人を動かす勢力を有すれども、之が爲めにその一生を誤り、墮落に終る例は世に少なからず。人を同化し、人の靈性を發揮せしむる權能を有する者は唯愛情あるのみ。名聞權勢は金錢にて賣買することとを得、されど心の奥に匂へる一片の温かき愛情は、冷なる黄金を以て購ふべからず。

愛情を生むものは愛情なり。愛せられんと欲する人は己れ先づ愛せよ愛は愛を以て購ふべきなり。人は意志の力のみによりて憎むべき人を愛し能ふか、罪惡悲哀苦痛等人生のあらゆる悲劇は冷膽なる頭腦より割出したる教訓によりて除き去ることを得るか。そは覺束なかるべし。罪の悲しみ、悔の涙、之を洗滌するものは、唯人情の奥底より湧き出る涙の泉あるのみ。基督の昇天以後、この同情の念が、失望者の心を暖め、不幸の人を痛はり、罪惡の巷に彷徨ひ、墮落の淵に漂ふ幾多の魂魄を光の世界に繋ぎ、悲しみの涙に代ふるに、喜びの涙を以てしたることは幾度ぞ。ア、同情よ、優しき名よ、蝶は花に眠る、汝が最も好んで女性の胸に宿らんとするは宜なり。ブリーメル女史曰く「世には爲すこと皆よく成功し、さながら麗かなる春の光の如く、行くところに平和を誘ひ、棲まるところに慰籍と恩愛を生み、共にある人をして之に與らしめ得る性情を有する婦人あり。こは全く神を恐れ、之に依頼する純粋なる情より來ると、もしこの性情、圓満に發揮せられんには、其感化は遂に男性の上に及び、人生の劣等なる快樂、感覺的欲望の發動を防ぐ唯一の武

器ともなるべし。

凡て情ある母の言葉や、優しき姉の笑顔は、嚴しき教訓の千言萬語よりも能く人を作るものなり。一家を吹き渡る長閑なる春風に、人知れず心の奥に咲き出てし愛情の花は、如何なる嵐の不意に襲ひ來ることあるとも、永久に散逸することなかるべし。宜なるかな、さる牧師は申されぬ。願くは我をして光に滿ちたる家庭の一員たらしめよ、かゝる家には萬般の義務も歡聲のうちに果さる。失望落膽は影を潜めて跡なかるべし、克己黽勉の德、こゝには得易かるべし。花笑ひ鳥歌ふの情味、また何にか味ふことを得ん。諸子は見るもの毎に樂しく、聞くもの毎に望を感ぜしむる一種の感化力を有する人に接し玉ひしならむ。我は惡を善に遷し、歡喜敬虔眞實寛仁大度の大氣を我等の周圍に滿たしむる力ほど、世に羨むべき惠あるを知らず。こは知惠によるに非ず、才能によるにあらず、膏雨の漸次に荒壞を潤すが如く、自然の修養より來るものにして、天賦と云はんより寧ろ馴鍊の德と云ひつべく、この德は如何なる人にも自由に得らるべきものなりと。

ビアトリカスはダンテに對して不思議なる力を有したりき。彼は啻にダンテの外部の生活に一大變動を與へしのみならず、亦深くその詩想の根底に突き入りたり。宛も曠野の猶太人に於ける神火の如く、ビアトリカスは彼にとりて唯一のインスピレーション、思想の指導者、凡て神聖と名づくべきものゝ標品なりしなり。

詩人の胸に燃へし大なる愛の前には、死は影を潜めたり、愛は凡てを物を變形し、凡ての物を純化す。ビアトリカスの死は遂にダンテの戀を變ずる能はざりしのみならず、却てその戀に靈のベアテスマを授けたり。彼は後年に記して曰く『彼女の面影の我眼に浮び來る毎に、我はこの世界に一人の敵をだに有せしこと

を感ぜざるなり。この博愛の焔は、我をして嘗て我に害を加へたりし凡ての人々を赦さしめんが爲めに、我胸中に燃へたりき』と。實にビアトリカスは彼が悟性の擁護者、靈性の天使、悲哀失望苦痛の慰籍者なる聖靈なりき。

婦人の特色に關するサミユエルローシリーの説に曰く、從來柔和にして多感なる婦人の公平なる斷判、善良なる意見、誠實穩和なる奬勵ほど人生を益したるものはあらずと。柔はよく剛を制す、婦人の本領こゝにあり。「彼等は唯天國に達する路線を地上に印せん爲めにのみ、其遊歩を運ぶべきなり」婦人の世にあるは荒漠たる曠野に匂ふ一株の花の如し。諺にも婦人は人生の花と曰へり。悲風慘雨世に荒ぶとき、人は猶ほこの優しき美しき花に對して心を温め、目を怡しますことを得べし。

史談

野路の蒲公英

四季阿彌

世の人の心のいとゞ賤しくもなりにけるかな。男も女も、妻と呼ばれ夫とかしづくに、容貌を以てし、財を以つてはするなり。容顏衰へ、財つくる時は、互に爭ひそむきて、仇し人を求めて又の契を結ぶもの少からず。敎ある人も、道を知りて道を踏まず、況やその敎無きもの、禽獸に劣りたる行爲ありとも、世の人は唯普通の事とや思はん。衣手の常陸の國、那河の郡野上の里に、與次右衛門といへる百姓ありけり。程近き岩崎といへる村より安といへる妻を迎へて、いと睦しく一年が程を過せしに、與次右衛門は楊梅瘡といへる病出て、さま〴〵に手をつくし、人のよしといへる醫

士は、遠き近きの別なくこれを請じ、効驗ありと聞ける藥をば價を問はずして求めつ。於安は晝夜其傍にありて、介抱怠なかりけれども、更に其甲斐なくて、顔は次第に赤く紫ばみて、目口もわかぬまでに膨れ上り、手足もたゞれ腐れて、うみしる床をひたし、寐返り打つに、背叉は手足の皮自らズル〳〵と剝げ落ちて、其下よりは血ばみたる肉のあらはに見られぬ。やがて顔は眉毛失せ鼻も流失せて形なく、目は瞼つりて、唇は兎口とかやいへるやうに歪みつゝ見る影もなき有樣とはなり果ける。去れど於安は更にこれを厭ふ心も無く、如何にもして良人の病を平愈せしめんと、神に佛に祈るはもとより、老ひたる姑に孝養を盡しつゝ、良人の醫藥便用など皆手一ツになして、夜も眠らざると度々なり。與次右衛門は程なく、男女の交もなり難き身となりしより、或日妻を其枕邊に呼びて、「和女も知るごとく、吾れ不運にして惡き病にかゝり、何時平愈すべしとも思はれず、それのみならず男女の交もならぬ身となりたれば、今は和女に餘儀なき頼あり」、と言ふ、於安は何事ならんと膝をすゝめて問ふに「知る如く平愈の望何時とも知れぬ病に臥し、ヨシ幸にして平愈するとも夫婦の交なり難し、和女は未だ若年き身なり、吾れとの縁を斷ちて他に嫁入して給はるべし。長き間の心勞假令死すとも忘るべきにあらず」、と言ふ、於安はいたく驚き涙を浮べて「難有き御志にはあれど、身にとりては却つて怨めしくも思ひまゐらすなり。一度良人として仕へまつる上は、如何なる事ありとも御傍を離れ、他に縁家を求むるなどの心露計もなし。老ひたる姑もおはさずや、吾身ならで誰れが孝養奉つるべき、さる事を思ひ給ふは病の爲にも惡かりなん、再び言出で給ふな」と言消して藥など煎じすゝめける。與次右衛門は妻の操たゞしく、心直ぐにもやさしきを聞きて、獨感涙にむせびけ

るが、猶ほさよ〳〵と思案の末、密に離縁狀をしたゝめ、妻を呼びて「妻たるものは何事も夫人に從ふべきものとかや、和方も今は我家に用なき者となれり、今日改めて離縁すれば、これを持ちて親許に歸れ」と言さして衾引かつぎつゝ臥したり。夫人の投出せるは離縁狀なり、コハ餘りの無躰よと種々に訴へ歎きけるが、與次右衛門も心よわくてはと思ふものから、果てはワザと怒りて詞さへ荒らかになりゆけば、於安は次の間にすべり出でゝ、暫しは正躰も無く泣き居たり。老ひたる姑は隔ての一間に在りて、靜に綿など繰り居たるが日頃には無く、珍らしくも嫁の泣聲フト耳に入りしより、何事ならんと、次の間に至りて見るに、嫁は細紐にて其膝頭を堅く縛り、鏡臺の抽斗より剃刀取出して、アハヤ自害せんとする爲躰に、驚きて轉び入り、其手にすがりてこれをとゞめ、仔細を問ふに云々なりといふ。姑もお安の人並ならぬ志に泣きて、與次右衛門にも斯くと告ぐれば、與次右衛門も切なる妻の心に耻ぢ、其過を詫び重ねて離縁の事を言出さゞりけり。春往き秋來り、年月重なるにつきて、產次第に傾き、下人も今は養はれず、農馬をさへ賣り棄たりければ、於安自ら看病の暇を見て、雨に風に、夏の炎天、冬の雪霜を厭はず、鋤鍬をとり田畑を耕し、一家の衣食をば支へたりける。

水戸中納言光國卿、御世をば綱條公に讓らせられ、西山の山莊に風流を樂しみ給ふの暇には、やつ〳〵しく扮立給ひ、一二の近臣を伴はせられて、民間の狀況を彼方此方に訪ひ、御心付ある毎には、綱條公に忠告しらせ給ふ事多かりき。或日お安の一人汗にひたりつゝ田を耕し居たるを、過がてに見給ひ、女の身の唯一人、田をうなひ居るは、非道なる主人に仕へてか、又は繼子などにて親のにくしみに遭ふ者なるべし、尋ねて見よとあるに、近臣進出で、お安に其身の素性、家

内の狀況など問へば、答は前に記せる所の如し。果せるかな啻の者には非りき、とて里正を召し尋ねさせ給ふに、事情一層精細なり。公にも世に珍らしき貞女よとて、御感斜ならず、夫より與次右衛門の家に御立寄あり、病夫をも御覧あり、お安には御賞詞を賜ひ、手づから金一包を下されたり。且つ綱條公に仰遣されし上、田畑は永代作取に心得べき旨を達せられける。されば知る知らぬ人々、米錢を多く贈りて、於安の身に榮をぞ添えけるとか。今にも後の世にも傳へ一摸範とすべき美談にこそ。

ヰクトリア女皇の愛讀書

英國女皇ヰクトリアの愛讀する書籍は其數いと多かる中に先づ宗教上の書籍にては『聖書』を推して第一とすべく德を進め心靈を養ふに足るもの是れに亞ぎ、神學教義等に關する議論的のものは是れを讀まず。去れば女皇が密室に於いて默想に耽り靈性を涵ふ時繙くものは大說教家と崇めらるゝデーン、スタンレー、博士ノルマン、マクレオドの說教集にしてロバルトソン氏の說教集の如きも好んで是れを繙き同氏の『基督の同情』の一篇の如きは特に愛讀さるゝ所のものたり。

女皇は亦た好んで歷史を讀み嘗て文豪カーライルが女皇に謁見せしときカーライルも女皇の歷史を愛讀するには驚きたりと傳ふ、中にも女皇の手にするものはマコウレーの物せしものなり。

小說作家中女皇の愛讀に値するものはサー、ウヲルター、スコットを第一としチャーレス、ヂッケンス、サッカレーこれに次ぎシャーロット、ブランテ、ジヨーヂ、エリオットの作を賞す、現今の作家中女皇の最も愛讀にかゝるものはオリフワント夫人の作ならん、就中其作『見へざる世の小巡禮者』は女皇が常に愛讀せらる所のものなりとぞ。

詩に於ては英國現代の詩人キップリングの作を賞し、近代の詩人にありては最もアルフレッド、テニソンの作を愛で、ロバルト、バルンスの作これに亞ぎ、ブラウニングの作も亦た愛讀せらる。

女皇の愛讀書は其數甚だ多しと雖も其最も愛讀するものは嘗て女皇が稱して『英國富强の秘訣』となしたる書籍＝『聖書』＝の右に出づるものとてはなし。

談叢

魚の話

北斗生

（二）

魚類の水練に達者なるは云ふ迄も無し。進まんと欲すれば進み、止まらんと欲すれば咄嗟の間に止り、如何なる方向にも容易に躰を轉し、總ての行動全く意の儘なり。而して其働きを爲すものは鰭なり。胸鰭は其手とも云ふべく、腹鰭は其足とも云ふべし。其位置に至ては種類により多少の相違ありと雖ども概して胸鰭は其胸に腹鰭は其腹にあり、間々胸鰭腹部に生じ、腹鰭其尾に近く生ずるとなるも、其は至て稀なり。肛門に近き所、鰭あり、其數一個なるものあり、或は二個なるものあり、又脊鰭と稱するものありて其脊に生ず、其數一個或は二個或は三個。鰭の數最も多きも大底十個を越ゆるとなし。

運動の遲速强弱に至ては、鰭の位置、及び其大さ、其他魚の躰形に依て各々差あり。或るものは力强くして、如何なる激浪にも抵抗して突進し、或るもの—例令へば金鎗魚鯱の如き—は力弱くして潮流に順て其行くに任し、時には潮流に逆らはんとするも、潮流に推し流がさるゝ如きあり。

尾—之れ亦一個の鰭—は其形種々あれども、其形に依

て魚類を二大種に分つを得るなり。脊骨延びて尾に至るものは尾の一葉他のものに比して極めて大なり、故に此種の魚を稱して、『ヘテロサーカル』（其尾同形ならざる義）と云ふ。沙魚の如きは此種に屬す。『パレチゾイック』種の魚は此種に屬するものにして、現今新古紀層の中に其化石を發見するや。曾て大古紀層の時代に於て『ヘテロサーカル』屬の魚類其繁榮を極めし頃は、蓋し魚類全盛の時代にして、地球上魚族の數最も多數を占めし時代なり。

曾て全盛を極めし『ヘテロサーカル』種も星移り物換り、其覇權はいつしか『ホモサーカル』屬（同形の尾を有する義）の占有する處となり、現時に至ては魚類は總て『ホモサーカル』種に屬し、『ヘテロサーカル』種は、殆ど例外として存するのみ。蓋し『ホモサーカル』種は、其脊骨尾に至らず。

魚類中鰭の極めて大なるものあり、鳥に水禽あるが如く、魚類に又飛魚なるものあり。此種の魚は海面數尺の上を飛び得るなり、或るものは殆ど一哩の空中を飛行し得ると云ふ。去れど其鰭乾燥し其軟性を失へば直ちに水に歸す。

飛魚の飛ぶや、或は海豚、鰹魚の追迫に堪へずして飛び、或は海蚊を得んとして飛び、或は己れと同種なる他の飛魚を捕へんとして飛ぶ。

『トリグラ、ルセルナ』と稱する飛魚あり、其口の内部に燐光を有す、此魚夜中群をなして空中を飛べば、幾百の流星飛んで大洋に墮つるの奇觀を見る。マラベル地方に『センナル』と稱する小魚發見せらる。此魚は性水を去るヿを好み、河邊に生ぜる椰子樹の幹に攀ずるヿ二三尺、數時間樹上に附着し得ると云ふ。其機關能く、水量の幾分を保ち得るを以てなり。

中央亞米利加の『ハッサル』と稱する魚は、己れの住みたる沼澤の水乾涸するや、其鱗と鰭の力に依り、水を

捜索せんとて、長途の旅行を爲すと云ふ。而して紅日燒くが如き日中すら數時間を地上に堪へ得るとは豈に驚くべきの至ならずや。若し沼水蒸發し盡くせば、蛭の如く泥中に潜みて再び水の來るを待つ、吾等は是に依て、魚類にも亦多少の智識有ることを證するを得るなり。

『レモラ』(或は吸魚)は其頭上に楕圓形の平板を有す、其物質柔軟にして自在に收縮するを得、彼は此機關を以て水中の物躰に附着し、或る時は大魚の腹部に附着し其保護の下に危險多き大洋を安全に横行濶歩するなり。

古代に於ては此小魚は能く、巨艦の進行を阻げ、甚だしきは之を止めて一尺も進む能はざらしむることを信ぜられたり。古人の奇を好み怪を愛するの甚だしき、櫂なくとも、帆なくとも、大風吹かずとも『レモラ』は其船を、好む處に運び能ふと云へり。プリニーは記せり、アクチユムの戰にアントニーの艦隊は、此小魚の爲めに一寸も動くこと能はず勝利は遂にオーガスタスに歸し帝位は彼の手に落ちたりと。詩人歌ふて曰く『風吹かば吹け、浪立たば立て、此小魚は彼等の狂暴を挫き、其力を縛すべし』と古人の愚なる笑ふべき哉。

鱝は巧に埋伏して、近き來る小魚を喰ふ。『エピペラス』も亦是れと同樣の兵法を用ひて能く、不注意なる小魚を呑食するなり。

華臍は其口の上に、鬚の如き二條の紐ありて、其端に各小さき肉塊を有せり。彼は恰も漁夫の鈎を垂るゝが如く、海底に埋伏して其鬚をゆらり〳〵と搖かす。不幸なる小魚は其肉塊に誑らかされ、近づき來るや、華臍先生は其巨口を開て之を吸ひ込むなり。

又『スコルペナ』と稱する魚は已れに二十倍の大さある大口魚を殺し能ふ。

亞細亞の海岸に住む『チエルモンス』と稱する魚は、其

嘴極めて長く、水面に翳せる木葉に蟲の附着せるを見るや、其嘴を高く水中よりもたげて、水を噴き出し、蟲を木葉より墮落せしめて、之を食ふと云ふ。

自然は敵を防がんが爲めに、色々の防禦器を魚類に與へぬ。或るものは堅牢なる皮を有し、或るものは鋭き針を以て防禦の具と負む。或る者は鰭の刺長く鋭くして之に觸るゝものを傷け、或るものは全身悉く針を以て覆はれ、其狀恰も蝟に似たるあり。

劍魚は其名の如く其上顎長く突起して鋭きと劍の如し。彼は此恐るべき武器を以て海中の動物中最も巨大なるをも攻擊し得るなり。英國の博物館には『カヲトホシ』の其劍を以て貫きたる大船の龍骨あり。

鋸沙魚は劍を有せず、其代りに一個の鋸を有せり。口端より隆起して長きは一丈に達す。此武器は堅牢無比、其尖端は錐の如く、鋭利なる骨質の齒順序よく列びて鋸の狀をなせり。此鋸齒は單に武器に止まり、普通の齒は口内にあり。

彼は此恐ろしき鋸を以て屢々鯨を攻擊して其胃を切り開き、又海豹の横腹に大穴を穿ち得ると云ふ。

又『醫師』『外科醫』等稱する魚あり、此魚は其尾端に外科醫用の小刀の如き者を有するを以て此稱あるなり。

總ての魚悉く攻守の具へあり、彼の電魚の如きに至ては又不思議中の不思議ならずや。

魚類程多數の卵を產むものはあらざるべし、其數少きも萬を越へ多きは幾千萬と云ふに至る。然れども此等多數の卵子も其化して一人前の魚となる迄には、潮流の爲めに洗ひ去らるゝあり、暴風怒濤の爲めに打碎かるゝあり、太陽に干し殺さるゝあり、魚族の餌となるありて其大部は無殘の死を遂げ僅かに百中の一、千中の一だに生き殘るを得ば僥倖なり。

魚は多く交尾せずして姙む、雄魚雌魚の傍らを過ぐれ

は、雌魚は直ちに姙むと云ふ。左に列記するは、魚類が一回に產する卵子の數なり、如何に其數の莫大なるかを見よ。

ベニザシ	八一、五八六個
鞋底魚	一〇〇、三六二
青魚	五四六、六八一
鯉	七〇〇、〇〇〇
鱈魚	一、四六七、八五六
比目魚	六、〇〇〇、〇〇〇
ターボット(比目魚の一種)	九、〇〇〇、〇〇〇
白ベニザシ	一三、〇〇〇、〇〇〇

(未完)

火山國の火山脈

無名氏

全世界の火山の數は活火山が百三十九個で、睡眠火山が六百七十二座ある、其内で、日本の火山が百七十を占めて居るといふ事丈けで我國を火山國と呼ばれるのも無理のないことがわかる。

百七十座の中で、本島と伊豆の諸島が九十、北海道が十八、千島が二十八、四國が一、九州が十六、其外の島々が十七。此外に硫黃洞と稱するものが三十八口ある、此硫黃洞とは時々、硫黃や硫化水素、亞硫酸瓦斯の類を噴きだすものをいふので。

さて斯の如く澤山の火山が日本全國に散布してあるとはいふものゝ。日本を貫く火山脈を其方向に由て二つに大別することが出來る。

其一はヒリッピン群島から起つて、九州から始まり、西南西より東北東に向て走るもの。

其二はカムサッカ半島から起つて、千島列島を一串し北海道に渡り本島に入て、北北東より南南西に向て走るもの。

さて此二つの反對方向を取て走る火山脈が何處で互にぶつかるかといふと上野、信濃、甲斐、武藏の間である。こゝで此二派が相合して(といふべくば)折れて東南に走る、これが則ち富士帶で、相摸伊豆から豆南諸島へと、遠く太平洋中に走て波底に沒し了るのが其れである。

然るにカムサツカの方から起つた脈(則ち北から南へと走るもの)を又た三脈に分けて見ることが出來る。(一)は擇捉國後の二島から蝦夷島の南部に連て硫黃山の噴起となり、西々南に女阿寒岳となり、こゝで暫らく其脈を消して再び後志に現はれ、樽前山とか臼岳と駒岳とか、色々の火山を含み、津輕海峽を渡て斗南半島の恐山、燒山となり、本島の中央を正面に向て下り、陸前、磐城、羽前の境を走りて上野信濃の境で大山脈燒點に合する。此脈に屬する火山の重なるものが磐梯山、那須岳、等である其他、藏王、男體、赤城などの休火山も皆んな此脈に屬する。(二)は本島の東北部なる陸奧の岩木山に現はれて、前の一派と殆ど並行し、本島の西部を直下して羽前の國に至り、少しく西に折れて御神樂岳白根山吾妻山などゝなつて上野信濃の境で火山脈燒點に合する。此脈の中の活火山は鳥海山淺間山などが主なるものである。(三)は羽後の寒風山を基點として日本海中に入り、前の二脈と並行して南々西に走り羽後の飛島、越後の粟生島を連らね、遂に本島に入て始めて現はるゝものが角田山である。これより日本海の緣を西南に走て燒山、妙高山、高妻岳などゝなつて富士帶の北を衝き火山脈燒點に合する。

さて又たヒリツピン諸島から起る脈(則ち南より北に向て走るもの)も前のと同じく三脈に別れて見ることが出來る。(一)は琉球諸島から始まつて惡石島、諏訪の島、中の島、硫黃島などに噴起し九州に入ては海門岳櫻島岳となり、霧島山となり、島原半島に入て温泉岳

となり多良岳となり朝鮮海峽に向て進む。(二)は肥後の西岸から始まつて、金峯山となり、阿蘇山となり、東南東に向て進み、黑岳、九重嶺、涌蓋山となり、豊後に入て由布岳、二子山となり、國東山嘴より瀬戸内海に入て長島平群島に渡り、四國に入て讃岐の飯野山となり、淡路を横ぎつて、紀州半島に入り、牟婁山となり、三河に入て鳳來寺山となり、北に折れて甲信の境に入り以て燒點に合す。(二)は岩見出雲の境にある三瓶山から起つて大山となり、丹後若狹の境の青葉山となつて北に折れ、飛彈越前に入て白山、大日岳、笠岳、燒山などゝなる。

以上の二大脈の外に、日本海中を潜行する一派がある、隱岐の島前島後から、海底を走て、能登半島に入り隱爪、法龍、鷲巣の諸山となつて現はれ、直に佐渡の金北山に飛ぶもの。

先づこれ丈けが火山國の火山脈を大觀したところであ

る。

雨露覺帖

一葉庵

(下)城下のすまゐ

七歳の年の暮、又父母と共に水戸に歸れり。梅香ヶ岡の下なる、下谷といへる所に住家を定めぬ。下谷は仙波沼に沿ふたる町にして、町の人々の多くは、其頃御獵場とならざりければ、大半此沼によつて生活したりき。鰕、鮒、鯰、鰻、田螺、鯉、雁、鴨、菱、蓴菜、蓮根、など其重なるものにして鰕、鮒、菱蓴菜は其内にも勝れたるものなりき。眞菰や蘆の悉く枯れたる葉に、旦の霜雪をあざむき、北風水を渡つて渚に海氷を見る頃より、鰕すくひの舟多き時は五六十艘にも至るべし。之を商賣とする人ならぬも、鰕をすくふ事

此菌は頗る乾燥度に對し鋭敏にして、其數、百萬もありしものが、二十度の温に廿四時間乾遇すれば生存するは唯僅少に過ぎざる程となる。又水中に放置せしめたるに同樣の結果を得たり、然るに同温同時間なるも肉汁等の培養液に入れ暗室に置く時は、大凡そ二週間も續生し得るなり、如斯く濕氣ある養液あればば最低温四度、最高温六十度、此間の温なればば生存丈は合ふなり、就中三十度近傍は繁殖に最適温といふて不可なし、元來病的細菌は温にて最もよく生殖し得るものなるが故に、近來細菌病原の爲四十度の高熱に至るとあるも、態々解熱劑を服用せずして、細菌自


初夏

滅を待つに如かずといふ説を主張する學者さへ出で來れるにあらずや。

人若し其純粹培養をなさんと欲せば、温度と培養基に注意せざるべからず温度は可也高きを要し、培養基は略啖、濃汁、血清、を擇ぶべし、寒天を用ゆる時も多少血色素を混入し置くと必要なり聚落は廿四時乃至四十五時間後に發育し寧ろ無色透明稍光澤ある小滴として出現し始む、久しきを經れば其中央部稍黃褐色を呈するとあるも、或は血色素の滲透たるにはあらざるなきや保し難し、而して聚落如何に熟する


さつき

も決して一躰流動するに至らざるものとす。
着色法は細菌鑑定の一秘術なり、インフルエンザ菌を着色するにはレフエール氏メチレン青溶液（三〇立方セメ、純酒精、メチレン青、百、立方セ、メ、加里硝液0.01%）を宜しとす、倘石炭酸フクシンの水溶液の稀薄紅色のものも可なり、少なくも五乃至十分は浸入し置くべしグラム着色法は染色不充分なれば此菌には用ゆべからず、是等の諸點は嘗て本誌に於て諸君に話したる回歸熱と相參照し給はゞ自ら氷解するところあるべし。
されば世の母たる人も能く傳染の原因は細菌にあるとを理會せば、自然其愛兒看病の際などにも、猥りに其咯啖、唾液を口にする等の不注意なかるべし、患者食器等も自ら留念する樣なるものなり、家庭上是等萬端周到ならざる婦人は終に一家擧てインフルエンザに罹るの不幸を見るに至らん、ゆめ〳〵等閑に付し給ひぞ。

（了）

家庭

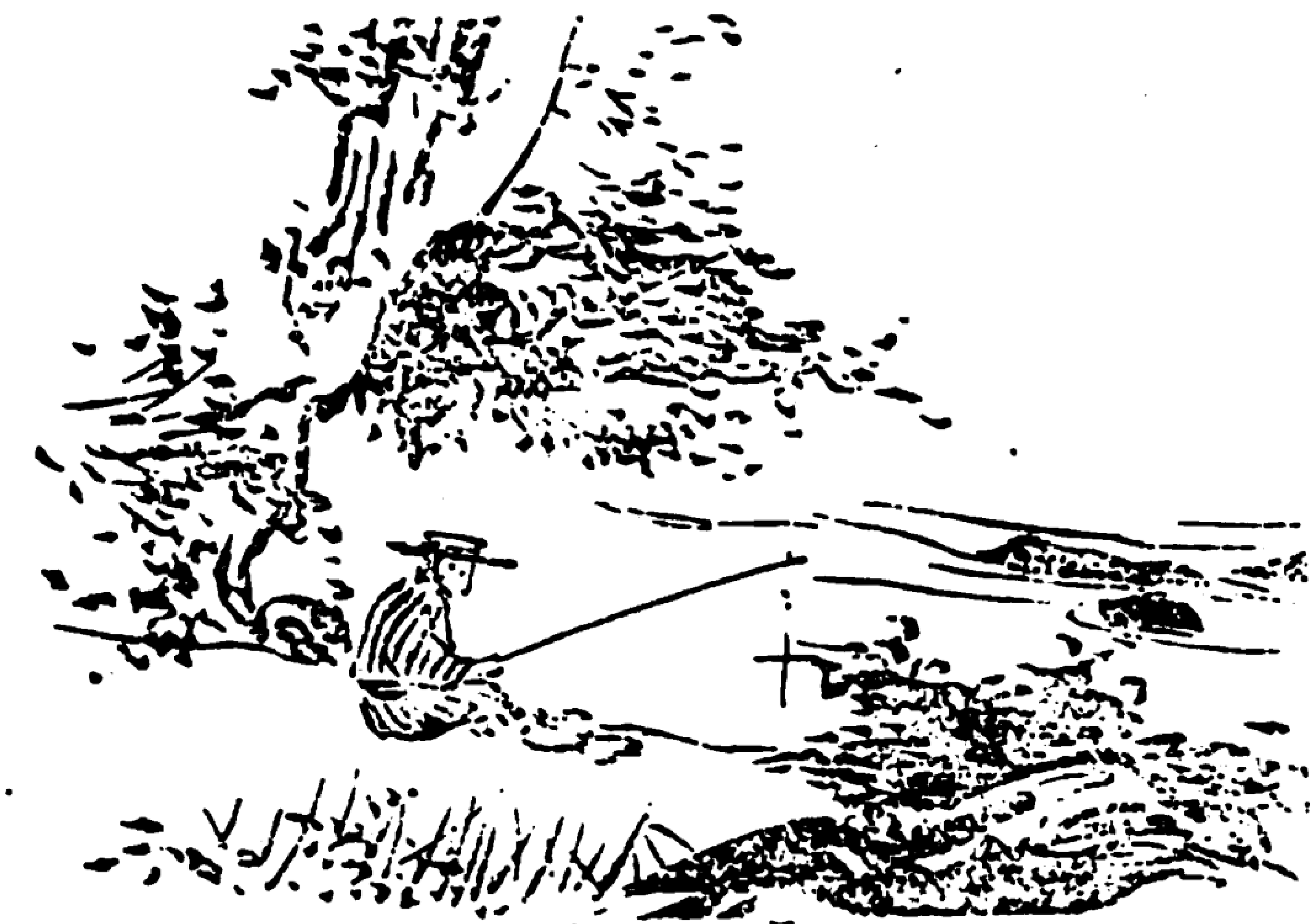
話のくさ〳〵

黄花

（一）母の聲

凡て言葉の同じ意味の語にても其いひやう其聲の調子によりては温かくも思ひ冷くも感じ、快よくも嫌にも嬉しくも腹立たしくもいろ〳〵に聞ゆるものにて、其感情には大したるちかひを生ずるものなれば、母親の子供に對する言葉はよく〳〵注意すべきことなり。さもなくば折角の爲になるべき言葉も一時のけんつくいやみとして甚だしきは嫌な記臆として小供の心にのこるべし。例へば早く學校にゆかんとおそくなるよといふにしてもけんどんにいひ放つとやさしく勸誘するとは小兒の感情どれほど違やも知れず。又外出の晴着

を眷がる小兒にそんな我儘ばかしいつてよどれつちまうじやないかと叱りつけるより、今きてしまへば今度外行きの時古いのばかしになるよといふ風に靜かにいひきかさば、小兒の心には如何に入り易かる可き。同じ命令をなすにも、小供を叱りて強て其事を行はしむるものは多くて、子供の興味を惹起し快よく勇みたつやうになすもの少なきは、歎かはしきことなり。何事にも感じやすき和らかなる幼な心に對いて朝夕言ふ母親の身は、一語一聲にも心を用ゐ徒らに己れの氣分にまかせて發するなどの事なきやう心がく可きなり。


初夏

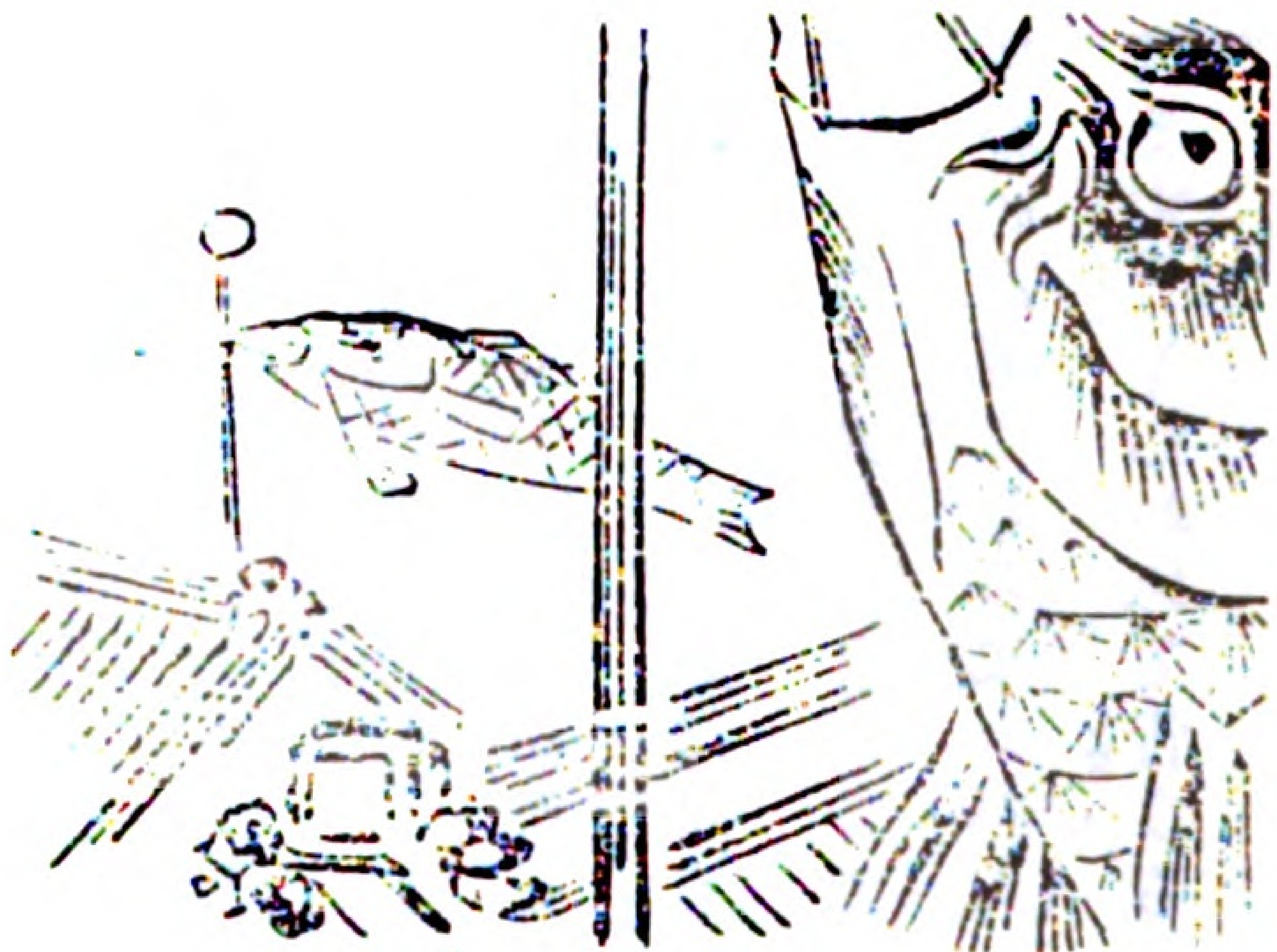
(二)贈物に就て

凡て贈物は何れの場合を問はず贈るが主にあらで己れの心意をあらはすために贈るものなれば充分受くる人の心をなぐさめ友情をあたたむるやう時候場合便利互の身分などいろ〳〵考へて、それそれ適當なるものを撰ぶべきなり。


初夏

德川時代には歲暮年始其他祝節の折にも諸大名より將軍家へ鯛を獻上する例ありしが、不漁の時などは、一諸侯の獻上物に供せしを魚屋臺所に待ち

うけてこれを買ひ戻し、他の諸侯の献上用にあて、かくて一の鯛幾かはり〳〵つとめて終には腐るに至る事ありといふ。斯くの如き虚禮となりては贈物もなき



さつき

方却てよかるべし。心ありての贈物こそ贈る人も贈らるゝ人も互にうれしけれ。

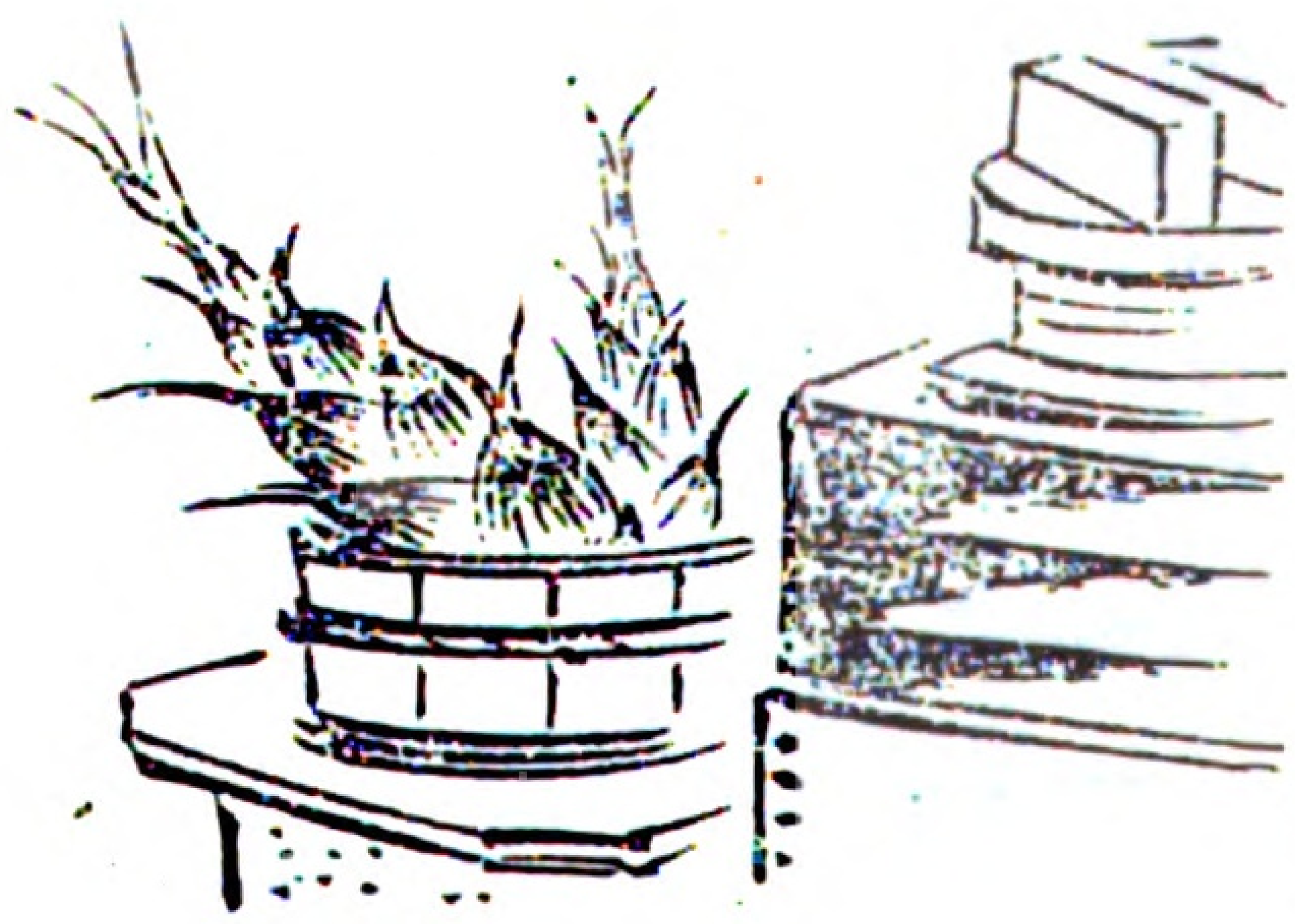
されば贈物は强ち物の多少高下にはよらぬものにて、心なき見事の贈物よりも、眞實なつかしみて遠方よりわざ〳〵手製の品などいひて送り越したるは一袋のお茶庭の花一輪にせよ如何にうれしく如何ばかり深く香るよ。

往年　今上天皇陛下東北地方御巡幸の際山里にて或翁

一杯の水を碗に盛りて

足引の山下水をくみあげて

わか大君にお茶たてまつる



初夏

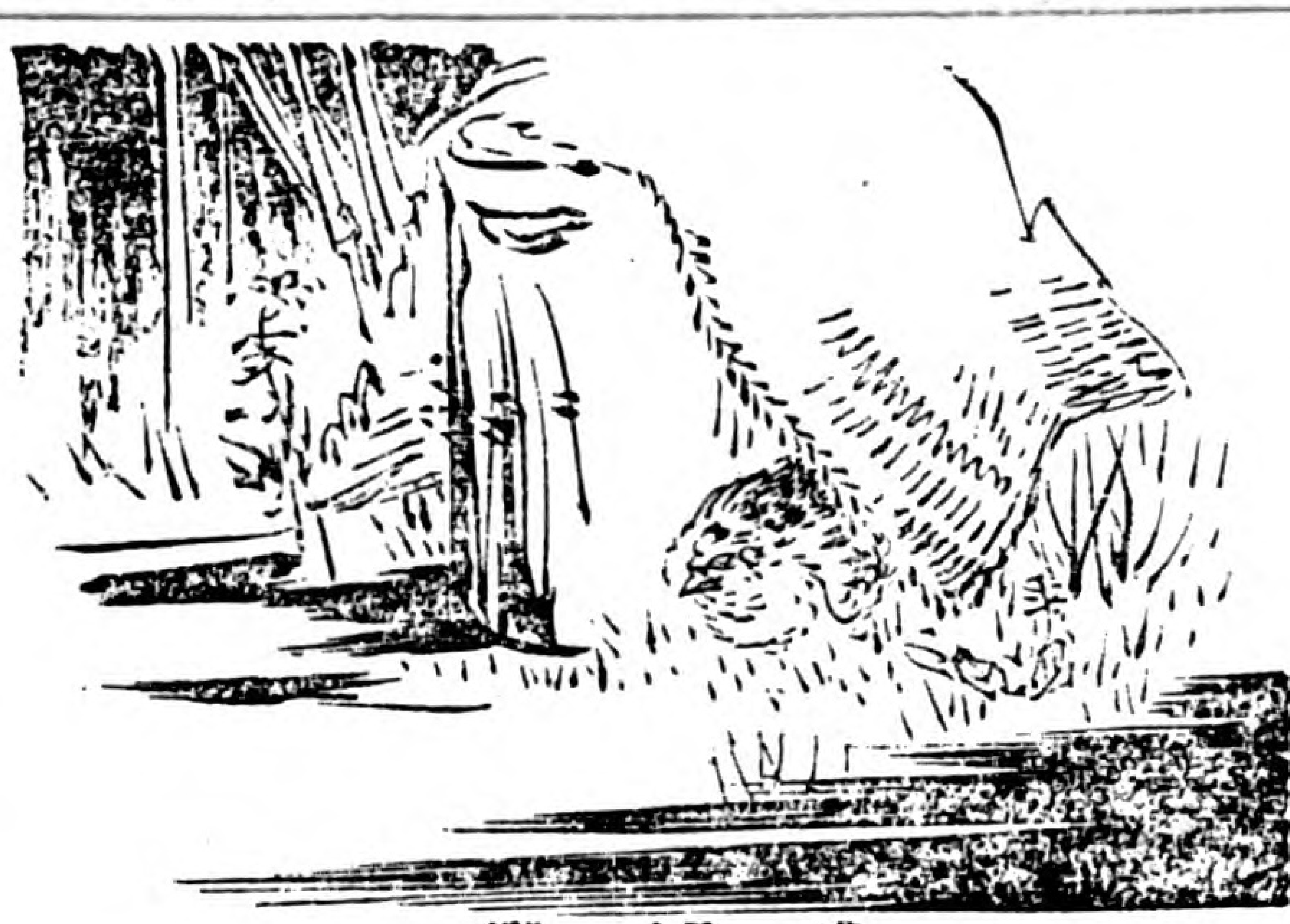
とよみて　陛下に奉りければ陛下はいたく其心をめでさせ給ひしとなん承はる。

かく心を旨とすべき贈物をいそがしき家などにては往々贈物の主旨をわすれて便利上より到來品をすぐ其まゝ包紙かへて他へ通用する人あり。これはよほど考へてなすべき事にて、折角心をいれて贈りて人は不快に思ふのみならず温かなる友情もために冷かになりはつべし。

(三)斯くありたきもの

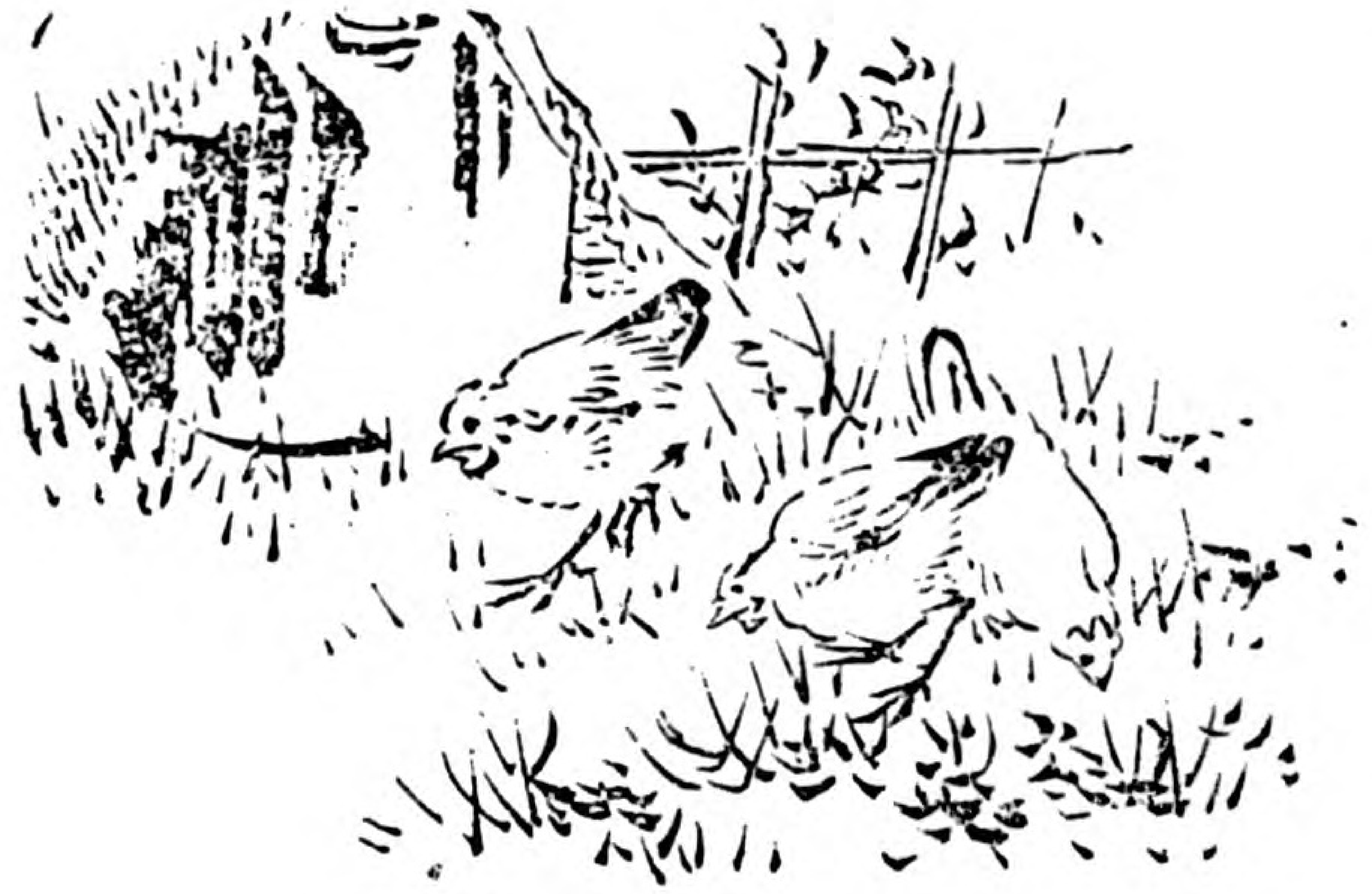
年の頃三十五六と覺しき細君蓮華草菫などいろ〳〵の草花のちらかりたるをみて眉を顰めあら〳〵しくはき出しつゝ「たつた今やつと掃除したのに直ぐこの通り、ほんとに仕様がない」とつぶやきて立ち去らんとする折しも、十二三の男兒さま〴〵の木葉を手に一ぱいもちながら柴折戸より飛び入り來り、いきなり「お母さん、こをれ」と自慢さうに手をのばせば母は「なんだよつまらんものをもつてきてちらかしてばかり」と叱りつけぬ。なほ小言いはんとするところに、十ばかりの活潑さうな女兒襖をすつと押あけて「お母さんあそこにおいた菫はしらないの?」とせわしげに問へば、母はます〳〵しかめて舌うちし「ほんとにお前たちは兩兒してちらかしてばかり、そんなものなくなつたつていゝ〳〵すてつちまいなさい」とけんどんにいはれて兄妹は折角興を起しゝ遊びを打破られて兄は手にもつ木葉をなげすてゝ外にかけ出し、妹はちりしく木の葉をうちまもりてやゝ不滿の色見えたり。

かゝる事實は至るところに見受くる事にて我國にては小兒のいろ〳〵天然物をとりあつめるを反て禁止する弊あり。何處の家にても、どこかの隅に少しぐらひは子供にかし與ふべき餘地なき事あらじ。母親たるもの少し眼、心をはたらかし成る可く小供を奬勵して海濱の避暑に拾ひし貝、野邊につみし草花、砂利よりゑらみ出せし小石の片などそれ〴〵空箱



成長(雛)

になり何なり分類排列せしめ、若し出來得る事ならば少しづゝ說明の勞をとる樣にしたきものなり。小兒に觀察の習慣をつけ、秩序の念を育て、科學の初步を



成長（養雞）

しらず〳〵の間に識り得る樣にならしむるは、斯る時にあるなるに、此大切なる時期を打捨置くのみか、却て禁止し、有害なる喫煙とか間食などの習慣にそむの暇あらしむるは惜しむべき事ならずや。

（四）吶

子供の吶癖は速かになをさゝれば遂に習ひ性となりて治す可らざるに至るべし。されば少しにても吶ると知らば、必ず言ふ前口を閉ぢ鼻にて呼吸し肺に空氣を充たしむべし。何時もいひそこねる語を丁寧に静かに繰り返し、さしすせその音ある語をたえず練習するときは大概は全治し得べし。然れどももし鼻に中分あるときは速かに外科醫に依賴す可し。

折にふれて

湖月姥

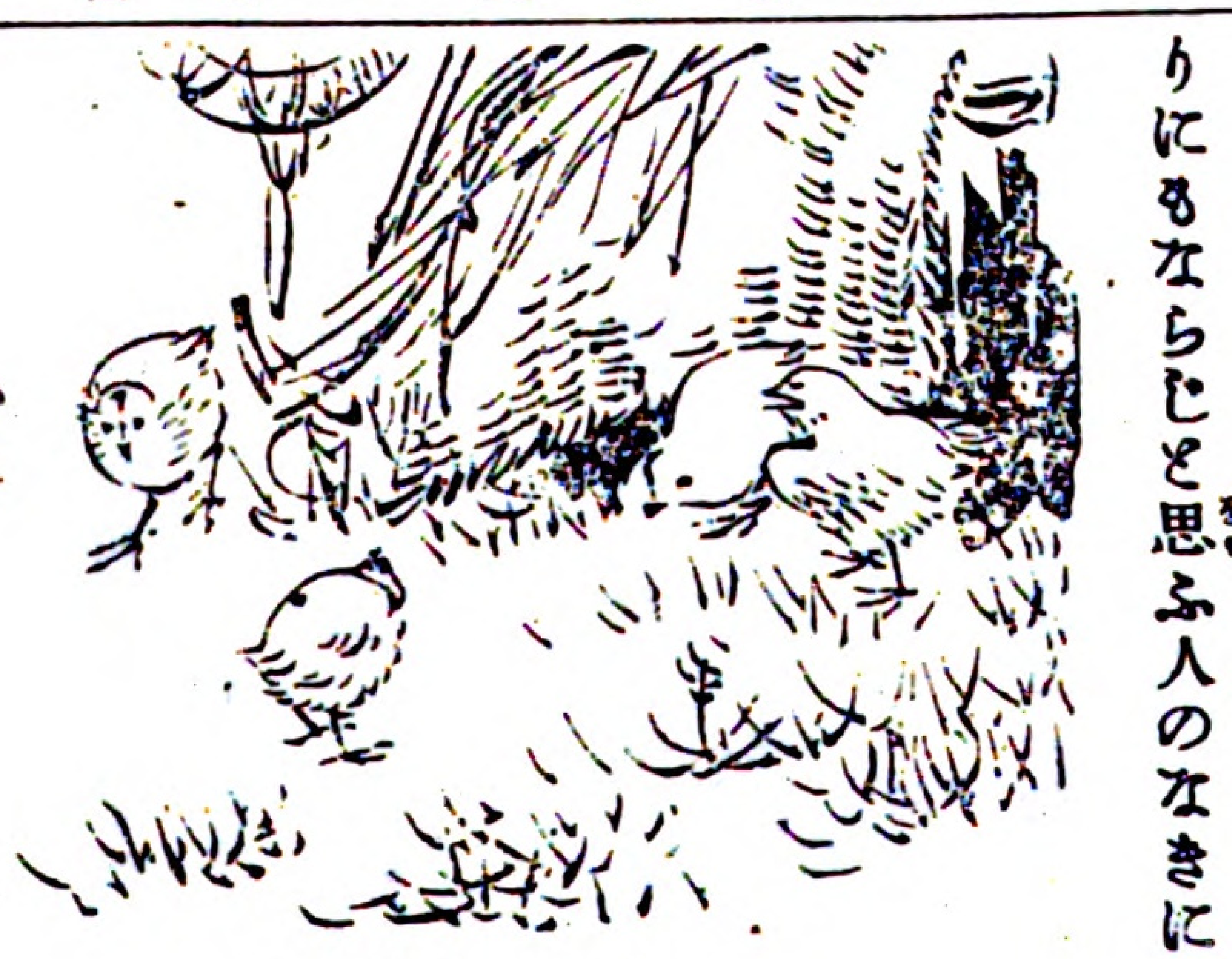
家風になじむ事

婦人と生れては大てい我生れたる家を繼ぐとまれにして他へ嫁ぐが多かり、さるからにまづ他人の家に行てはその家風をよくまもらむとを心がけかんやうなるべし。今は女子敎育の道盛になりぬれば大かた女子これほどのとはわきまへたらむも、昔より嫁子十年などい

ふ誘さへありてその家に居なじむまでは容易ならぬものなり。さてその家に落つきては舅姑につかへ夫にたいすることはもとより女たり妻たるべきことをつくすはいふまでもなきことながら、注意すべきは良人の知己朋友親戚などよく良人しうとめに聞き置て必ず粗略なる待遇なきやうにあるべし、同じき親戚の中にも濃き厚きあり朋友にもたゞ知りあひと何をもうちあけあふ知己との違ひどもあるべし、それ等よく良人より聞き置き、良人不在の折柄知己朋友の尋ね來むときあらぬあいさつなどふるまひたらむにはその知己朋友の感情を害し、わづかのことよりして家内をもらひてより知己遠ざかるといふやうなること、世間まゝあること、わかき人々はよくこの邊心得置れたきことなり。

婦人にて酒のむと悪しき例

世の婦人には隨分酒を好めるものも多く見うけられたれど今日の世に新らしき敎育をうけられたる婦人には大かたは酒飲まぬかたなるべけれど、また格別にさわりにもならじと思ふ人のなきにしもあらじ。ある富める家の今年五十七八にもなるらむ婦人の若き時より子供多くあり丈夫にてあらば八人の子持なるべきを幸あしくていづれも當才に亡くなりまたは流産もあり死して生れしもありたまく一ヶ年位育ちはじめて此度はと喜ぶ間にまた無き數に入りたるなどついに一人の成育ちたるはなくて今は唯老夫婦のみなるが、此婦人若き時より酒をたしみ何よりの樂しみ



成長（養雛）

とするにて今もなほ夕飯には一杯、老人と酒をのむが第一の心やりなり、されど人には、わが子育たざるはまつたく他に故なく酒をのみしがためなりとて、若き婦人の酒のむとをば必ずとゞめける

またある家のこはまだうら若き婦人なるが子供多く懐姙するものから二三ヶ月にて何時も流産しさせては前の婦人の如く一ヶ年位育つも兎角その子供弱々しくて亡くなり、今に子無し、此婦人も酒を飲み慣れしよりかゝる結果なりとさる醫師はいひき、酒飲むため子無しとはあながちに言ひ下し難くはあれど、女の酒飲まむとは見苦しくもあり身の害になるとは見やすき理なれば婦人はかまへて酒のまざらむやうありたし。



成長(養雞)

食物としての果實

春は何時しか夢と過ぎ去りて、花美しかりし樹々の枝は若葉の緑色濃やかなる間より、青梅、さくらんぼを初として果實の小やかなるを見るにつけても、やがて熟さば目に見たる花の美しきに比へてその果實の味甘からむとを思ふ。梨、李、杏、林檎、桃、柚子など園林に栽培たるが成長ちしを見るばかりにても心ゆくを、家庭生活の資料として食物に供せんとはまたさらに樂しくもおもしろくも益あるとなりかし。

食物として果實は營養に大切なる性質と効用あり、果實の液汁は自然に蒸溜せられ煮沸若くは濾過たるものにて、容易く身躰の組織を益し、化學上よりいへば、

ポッタース曾達、燐の諸種鹽類を供しまた身躰中の毀敗となるものを吸取り、總じて人躰にいふべからざる利益を與ふその中に含有する酸類は疾病を豫防するの効著るきは、梅干の我邦一般の必用食品として供へらるゝによりても知るべし。

德川家康が敗軍を率ゐて走れる時、一行の人々飢渇に耐え難くなりしを、大久保彦左エ門の機轉にて此前路に梅の林あり今少しなりと勵ませしに、人々口より津を生じて渇を醫したる話もあり、米國のフロリダ州セミノールの戰には、兵士の下痢及び不消化に惱めるもの多かりしが、此等の患者は病院より郊外にぬけ出でゝ果實を食ひ特に黒いちごを食用して病を醫したるといふとあり。なほコレラ等の病患者を桃園に送りて滿足なる結果を得、窒扶斯熱にかゝりし下痢症のものに桃を任意に食せしめしによりて恢復せしめたる醫師あり、此人の言によれば、かゝる疾病は果實の任意使用によりて普通の管理法よりも短期にして尚良好なる醫法なり、予は果實を自由に與ふるときは衝動藥の使用は需要稀なるべしと思ふ、猩紅熱實布的利亞の手當に於ては夏期に於ける果實及野菜は有要にして、かの葡萄及「バナ、」を患者に自由に與ふるときは熱に伴ふ疾病はその跡を絶つべく不消化症に在ては何等の醫藥を用ゆるよりも熟したる健全なる果實特に桃を最も宜しとすといへり。



くれなゐのうす花櫻ちり果ててつゝじぞ咲のふしぼなりける　(宣長)

此の如く果實の人躰に營養の効あると大なるものなれ

は凡そ一家の主たるもの主婦たるの人々は、此心得ありて常磐木の梢を衛生上その庭に植ゆると共に、果樹の培養を手づからなし、時節に應じて自然の食物たる此果實より家庭の上に大なる益を得むとこそ望ましけれ、一例を林檎につきて述べんに、林檎は果實の王と稱せられ身躰の活動を刺撃し腦髓に最も適當の關係を有す、これはその中に燐素の多量を含むによる、此燐素は實に腦髓の保護たるのみならず實に知識を補ふ所の大切なる營養物なればなり。



水底に同じ影あり燕子花

米國に於ては各種の穀を除きて食物として林檎の如く善き生産物は無しといふも可なるべし、林檎を食ふものは不消化性若くは膽液の病を患ふと稀なり、英國の某の言に果樹園の榮える處に棲まむには醫者は忽食となると、我邦にて十月の閉戸醫者といふとあるが、十月は氣候の順和平靜なるが爲に病人少き理由なるべけれど、此語によりて或は果實の多く食せらるゝ爲に病少きにはあらずやと思はるゝ所あり。

林檎は肉食によりて生ずる所の身躰の弊害に對し清涼防腐の用をなす自然の解毒劑たり、植物酸及び芳香に富み、黄疸、不消化、肝臓の麻痺等に向ては實に良薬たり。外國人特に米國人の林檎を貴重することとその詩歌に咏じ文辭に稱美するを以ても知るべし。その効の大なるとも明かなり。

林檎は生食を可とし、別に調理するを要せず、され

と之を試みむとならば方法あり。

小形の錫製林檎くり器を求め（或は小刀の類にても可ならむ）之を以て外皮を去らず、好むだけの林檎をくりとり、之を陶器製の皿に上せて熱竈に置き、くりたる中の處には上等の砂糖を充たし、その熱するまで之を焼き後に取出し食ふべし。

林檎の成分は、百分中八十一より八十五の水分を有し、同じく六より十の砂糖分、〇、五より一の游離酸分、三より八の蛋白質物、及〇、五より少き鹽類分を含む、最も佳なるは生食にあり、生食には汁液多きものを良好とす、朝食の際に食ひたる一個は往々人をして一日間快からしむ。林檎に次ぎて効用あるは、葡萄なり。

葡萄の成分は、種類、地質、氣候及天氣のありさまにより差違あり、

一、葡萄の必要部は糖分にして百分の三〇より一〇に至る、成熟期に於て天氣温暖に乾燥ならば糖分從つて多く酸類を含むこと少し。

二、如何なる葡萄も葡萄酸を含む此は林檎の林檎酸に同じ。



春風のみきはの松なふくたひにささうちかはる池の藤浪　（春滿）

三、葡萄には蛋白様質の少量ありて血中の蛋白に類す又多少の護謨及糊精あり、

四、鑛物組成分の酒石酸、ポッタース、曹達、燐酸、石灰、苦土、及鐵を有す、

五、色素は少量なり、酥酸及脂油を含む。

六、百分中七十より八十は水分なり。

葡萄の營養價値　葡萄の滋養品たるはいふまでもなけれど、肉類など、同様ならず、假に鷄卵一個の中に存する蛋白質の同量を得んとするには、葡萄一斤以上を用ひざるべからず

此果實の價値は無窒素物、酸類、鑛物質、水分及び清涼劑あるに存す。

その生理上の効用　通常食品と共に日々一斤乃至二斤の量を食すれば營養を増し、分泌排泄を進め、肝腎及腸胃の作用を整へ健康を進む、その糖分は消化を要せずして血中に收められ必要に應じて効力を與ふ、その糊精は「ペプシン」（營養物名）の分泌を進めて消化を容易ならしむ、燐酸を多量に含むが故に身躰殊に腦作用を助くるの効多し。


散り後ておもかげにたつ牡丹かな　（蕪村）

葡萄の良種は（一）子實は小に過ぐべからず（二）外皮は薄かるべし、（三）種子は細薄にして小なるべし（四）甘味にて快き芳香あるべし（五）液汁は多濕ならず子實は肉質なるべし（六）一定の成長即ち硬きところあるべし。

梨　は鐵分の多量を含む、

桃　は虚弱者の補益物たり、

櫻桃　は美酸を以て膀胱及腎臓病の治療品たり

黒苺　は砂糖を以て煮る時は下痢に有功の飯料を給す。

次號に於てさらに多少の研究を經て他の食物としての果實につき述ぶべし。

臺所のため

◎紫蘇飯　生紫蘇を鹽にてもみ水にて洗ひ、よくしぼりて細かに刻み飯を常の如く仕かけ、よき頃にうちませ味淋の薄き液を少し加ふべし、また紫蘇を摘みとり日に晒して細末とし、飯の煮たちたるころ釜にいれたきこむもよし。

◎筍　は時節柄當分の料理草なるべし、これをゆでゝ程よく切り、油揚豆腐を細かくきりこみ煮れば油揚煮となる。

◎その葛煮　筍の煮上がりて鍋をおろす前に、葛を水にときて入れよくまぜあはす。

◎いり煮　筍の軟なるを皮つきのまゝゆでゝ冷水に入れ、まだ冷えざるうちに外皮をとりて細かに切り、胡麻の油にていりあげたるものに、里芋燒豆腐をいれ(慈姑なほ妙ならむ)味淋と醬油にて煮るべし。

◎筍の煮かた　によりては白粉の出ることありこれは煮あげの時に梅ぼしを一ッ入れて直ぐにとり出せば白き粉はふかず。

◎筍の二杯酢　これは筍の種類にもよれど、極く軟かなるところ(さきの細きところより)を湯煮にして細かくし、これに柚子の酢と砂糖(或は味淋少し)とをかけるなり一寸うまきものなり。

◎筍と雞卵　筍をうま煮にし、その中へ雞卵を入れてかきまはすべし。

◎梅子の砂糖漬　なほ成熟せざる梅子をとり、皮をむき二つに割りて核を出し、よく日光にほして肉の堅くなりたらば、梅子一升に、砂糖二百匁と鹽少しとを混ぜ合したるものを以て、瓶につけこみ、瓶口を密封じて光のあたらぬなるべく暗き所に置き後日食用とするとき、砂糖を少しふりかけて用うべし。

◎梅の菓子　梅子の皮をむき、わさびおろしにておろし、葛粉をかたく溶きあはせ、これに雞卵と白砂糖と

を加へ、よく混ぜ合して一通りむし上げ器中にうつし青粉少しを加へて、ねりまぜて梅子の形につくり、蒸籠にならべて再びむし上げるなり。

◎豌豆飯　豌豆のなほ柔かく青きを摘みて飯に炊きこむなり、鹽加減あるべし。總じて豌豆は青きうちは風味此上無く佳良に鹽うでにして茶菓に供するもつとも佳なり。

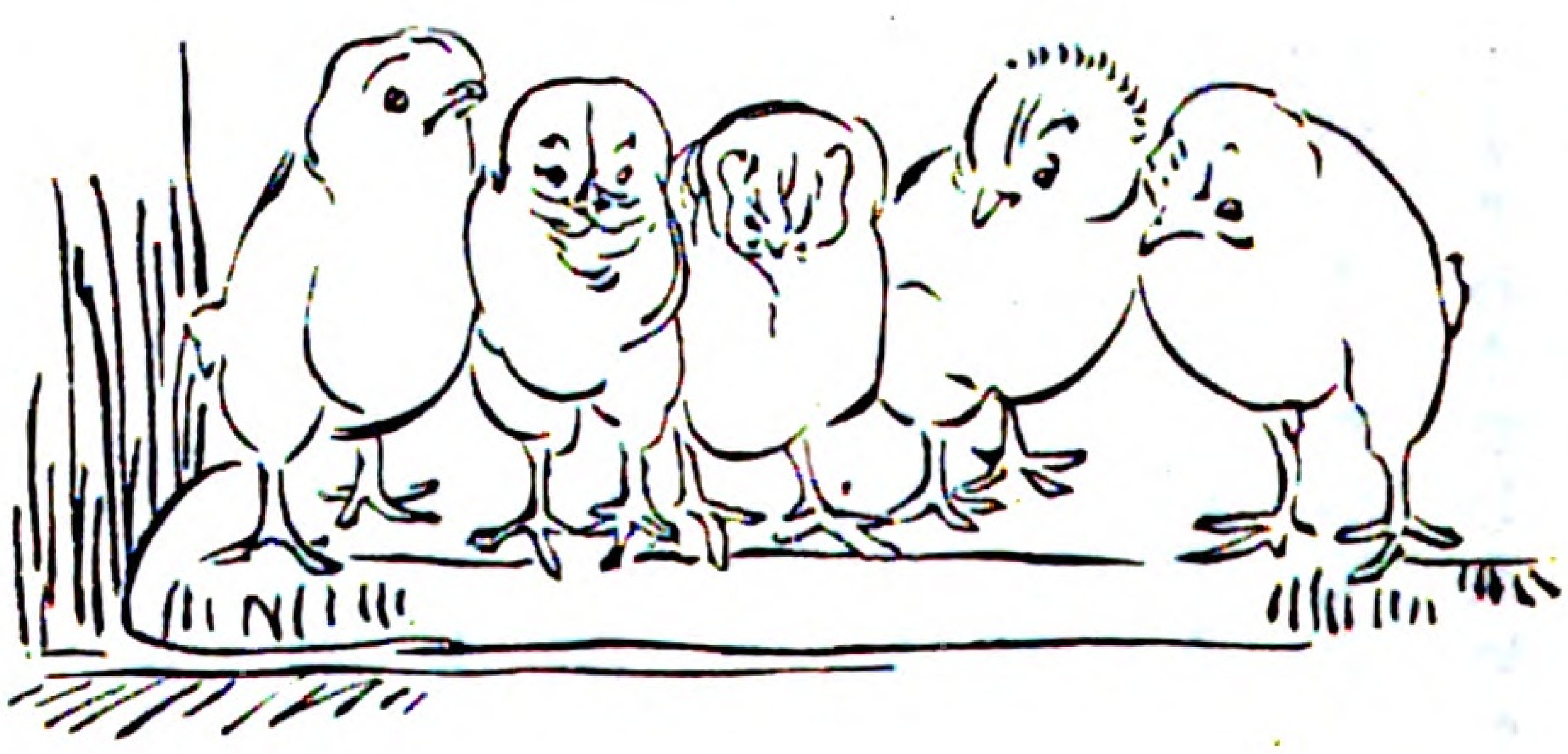
小兒の世界

ひよっ子の觀兵式

や、え、

『ジョン、今夜は雨が降るから止そうヤ』

ッて云ひながら、大きな肱掛椅子へよりかゝつて、御秘藏のジョンてエ犬の耳を引張つてますのは、次郎さんと云ッて今年十一になる坊ちやんです。次郎さんの



御父様は昔し何んとか云ふ國の公使館に永い間御つとめなさつてたんだそうですが、今じや御役を御やめなさつて、毎日客間のピアノを彈たり、御庭の菊へ水をかけたり、夜になると次郎さんや三郎さんを集めて、アラビなんとか云ふそれは〳〵面白ひ御話をして下さるのが御定まりのやうでした。

デ三郎さんはまだ小さいから仕方がありませんが、次郎さんはもう十を越してるからと云ふので、御父様の御話が濟むと、何時でも度胸だめしにジョンを連れて裏の御庭を一廻り廻つて來るのが當り前でしたが、今夜は雨も降つてるしマア御

止めにした方がよからふッて、今自分の御部屋へ歸つてジョンに其の事を相談してゐる所なんです。

『ジョン、ほんとに止そうチ、此んなに雨が降つちや靴も何もたまりやしないや、チ、チ』

ジョンは何んとも返事をせずに、眼を細くして次郎さんの顔を見てゐましたが、大方腹の中で『ナニ坊ちやま、雨が降るからなんて云ッてらつしやるが、ほんとは今夜の御父樣の御話がコワかつたからに違いないんだ』とでも云ッてたんでしよう。其の中に、奥の方からパタ〳〵〳〵つて誰か御椽側を通つて此方へ來るものがあるやうでしたが、フイと戸を開けて御小間使の淸やが

『坊ちやま、玉子が出來ました、召上りませんか、ヲヤまあ厭だことまだ洋燈もつけなんですサ、竹はホントに何樣したつてんでしよう』

『淸やいゝよ、いゝんだよ、僕あストーブの火があるからモウ澤山、玉子も食べたかない〳〵』

淸やは稍半時坊ちやまの顔を見つめてましたがやがて、

『坊ちやま、何樣かなさつたんですか、御加減でも惡いんじやありませんか』

『ウヽン、御加減なんかチットも惡るかありやしないや、僕ア今いゝ事考へてるんだから、御前御方へ行つといでョ』

淸やはケゲンな顔して出て行ッちまいました。坊ちやまは大きなアクビを一つして、

『けえど、淸やはゑらいに違いない、何故つてえば、誰がこさへたつてあんなに御いしく玉子をこさへるもなァありやしないんだものヲ』、

云ふと何處か遠くの方で

『玉子がうまい?、御前はチットも可愛そうだたァ思はないか』、

坊ちやま、一時はギヨツとしましたが何も玉子を食べたからつて、玉子が泣いたり笑つたりするのぢやァな



し、なんで可愛そうな事があるもんか、馬鹿々々しいつて腹の中で笑つてますと、又同じ聲で

『御前は毎晩キツト一つづゝ玉子を食べるじやないか、時によりや二ツ三ツぐらゐも食べる癖にちつたお勘定もして見るがいゝ』

ハテ勘定と、ソ勘定、僕ァ今丸る十だからして、十へ三百六十五日を乘けると、五零が零、六零が零、三零が零、一五が五、一六が六、一三が三と、ソ三千六百五十か、それへ毎日ならし一つ半づゝ食べるとすると、此りやチツト六ケしいな、エ一ツづゝて三千六百五十か、それへ半分だから三千六百五十の半分、エ、ト千八百四十五か、こいつを前のをへ寄せると、五千四百九十一、まあ驚いた五千四百九十一、まあそんなに食べたのかしら五千四百九十一、ツて坊ちやまがしきりに勘定してゐますと、又さつきの聲が

『五千四百九十一』

ツテ同じやうな事を同じ様な調子で眞似しました。

「なんだ、失敬な、五千食べたつて六千食べたつて御前達の御世話にやならないぞ」

坊ちやま大力みに力みますと、急にヂョンが頭を上げて、何かしらウー／＼ッて呻り出しました。

『ヂョン、何樣したんだ、ヂョン』

ヂョンは其のまゝ又頭を坊ちやまの膝の上へ載せて眠り始めましたので、

『なアンだ、ヂョンの野郎、夢え見やがッて』

ッて云ひながら、坊ちやまもウト／＼しはじめますと、又ヂョンが先よりはげしく呻り出して、終いには躰を起して、ノッ／＼入口の方へ出掛けて行きますので、坊ちやまも何かと思つて立ちながら戸を開けましたらまあ驚いた、可愛いらしい雛つ子が五匹、眼白押しをしながら戸の外に立つてるんですものを。

雛つ子は大きな犬にも坊ちやまにもヂヂけないで何かキヨッキヨッキヨッとしやべッてましたが、やがてヂョンの股をこぐつて、室の中へ飛び込んだかと思ふと、五匹揃つてストーブの前へ列んで、頻りに又押しつことやつてました。

坊ちやまは戸を閉めて、ヂョンの耳を引つ張り乍ら椅子へ腰を掛けますと、又ヂョンが呻り出して此度は戸の側まで行つて、頭をすりつけてゐますので『ヲヤ又入らつしやつたのかしら』と思つて戸を開けますと、まあ驚いた、今度は三匹、而かも同じ樣な奴が又立つてるんですものを。

坊ちやまは

『マア今夜は何樣した晩だッてエんだらふ、八匹なんて、雛つ子がサ、一躰何處から來たんだらう』

云ッてます中に三匹の雛つ子は遠慮會釋もなく御室の中へ飛び込んで今度は、坊ちやまの座る椅子の上へ列んで仕舞ひました。そして其の押しつこしちやア轉り落ち、押しつこしちやア轉り落ち、其のたんびにキヨッ

〳〵ツて騒ぎますのが、ソリヤ御可笑くて〳〵たまりませんかつたから、坊ちやまは壁へ倚りかゝつて見てゐますと、ジョンも面白そうな聲を出して、坊ちやまの方を見ちァ、雛つ子の方を見、坊ちやまの方を見ちャア、雛つ子の方を見、餘程恐悦面をしてゐました。五分程經ちますと又ジョンが呻り出しましたので、切こそ先生御座んなれッて、坊ちやま急いで戸を開けましたら、又そろ二匹飛び込んで來ました。

『チヤ〳〵幾匹やつて來るんだらう、雨の降るのに、マア、まだ來るかも知れないから開けといてやらふ』

一體雛つ子ッて云ふものは一邊に十三づゝ孵るものだと云ふからして、あと來た處が二匹か三匹だらふと思つて、坊ちやま戸を明け放しに爲て置きますと、暫らく經つて小さな足音がパタ〳〵〳〵〳〵此方へやつて參りました。坊ちやまはストーブの側の方にジョンの頭を抱ひて立つてましたが、之を聞くと、

『御遠慮なしに御這入りなさい、御案内には及びません、君等の姉さんや兄さんはとつくに僕の所へ來てゐますよ、御這入んなさい〳〵』

見ますと三匹じやありません、四匹、五匹、六匹、七匹、十匹、廿匹、三十匹、四十匹、チヤ〳〵五十匹、六十匹、

『まあ驚いた、何様したんだらふ、マア、マア、ジョンや、ジョン、何様したんだらふ、マア』

坊ちやまはあきれ返つちまつて、眼を丸くしてゐますと、ジョンもビックラした樣な顔をして呻つて居ます、百だか千だか勘定出來ない程の雛つ子は椅子の上にも、机の上にも、本の上にも、寢臺の上にも、窓の上までも上がつて、飛ぶやら翔るやら、押すやら轉ぶやら、蹈まれて怒る奴もあれば、蹴られて泣き出す奴もあり、坊ちやまの足下もジョンの膝の處も、モウ雛

つ子で一杯になつてホントに身動きもなりません位。中でもズウ〱しい奴はヂヨンの頭へまで飛び上つて、キヨキヨキヨキヨキヨキヨーなアんて高慢な面してるのもありました。

其う云ふ中にも雛つ子は續々室の中へ飛び込んで來て、モウ室中一寸の隙もない樣になつて參りました。ヂヨンは困つた樣な顔をして坊ちやまの方を見て、何樣かして下さいッて云いますので坊やまは、

『おゝヂヨン、御待ちよ、雛つ子は直きに下りるからチッとしといで』

ヂヨンは仰せに從つてチッとしてゐますが、雛つ子は仲々下りません、

『今に御腹が減くと行くに違ひない』

ッて云つても雛つ子先生、仲々御腹が減きそうな風もありません。其の中に坊ちやまの机の上へ乘つてた奴が、側から押されたので、ヒヨット硯の中へ飛び込んで、サアそれで机の上中飛び走ひたものですから、坊ちやまの御本も錦繪も寫眞帖も、今朝買つたばかりの「少年世界」も滅茶々々になつて仕舞ひました。是れには坊ちやまも少々腹を立てまして、机の上へ乘つてる奴を皆んな追ひ落しましたら、今度は坊ちやまの躰へ飛び上りまして、肩へとまるものもあれば、肱へかぢりつくものもあり、中にも酷ひ奴は坊ちやまの頭へ飛び上りまして、自分達が不斷芥溜や畑を掻き廻すやうに、坊ちやまの頭を掻きはじめました。

『ヲイ、惡戯けるのも宜い加減にしないか、一躰此處を何處だと思ふんだい、人の室へ斷りなしに這入り込んでサ、御負けに人の机の上を墨だらけにしたり、人の頭へ飛び上つたり、宜い加減にして置かないとホントに酷ひ目に逢はしてやるぞ』

云つてもなんでも雛つ子は平氣なもので、机の上へも叉飛び上る、坊ちやまの肩へも叉とまる、飛ぶやら、

日本赤十字社長 伯爵 佐野常民君題字
子爵 品川彌二郎君題字
日本赤十字社幹事子爵松平乗承君序文
華族女學校幹事 淺岡一君序文
藤井玄溟 著

瓜生岩女肖像入

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩

定價一册金貳拾錢 郵税四錢 郵券代用一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有髯の男子を凌ぎ之が旗幟を翻すものは甚少し瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の為に國家の為に粉骨砕身し以て天下百世の龜鑑を垂れしもの岩女を推して當代の女傑と為し慈善家の泰斗となす豈過稱ならんや本書は其畢生を叙せし者なり天下の人士讀め！本書を讀め！一度本書を讀まば貧婦も貪廉に惰夫も猶起つべし請ふ本書を讀め！

發行所 日本赤十字發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地

三輪田まさ子著

再版 女子教育要言 全壹册

定價金參拾錢 郵税四錢 郵券代用一割増

三輪田刀自の婦人教育に於ける頁績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せず本社昨年十二月本書を出版せしに大に世の高評を博し今や再版を出版せり本書は單に教育の方法に止らず婦女各自の訓戒となるべき義理を叮嚀親切に説き諭されたるを以て教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懐く婦人も針を持てる少女も苟も我國の女子たる者の必讀すべき頁書なり

發行所 國光社
東京京橋區築地二丁目廿一番地
（電話本局八八）

故橫井平四郎著　男橫井時雄編　（明治廿三年一月初版（爾後缺品））

故松平春嶽侯題字
勝安芳伯序
由利公正子手翰
長岡護美子題詩
故元田永孚男後序

小楠遺稿

小楠翁肖像遺墨石版數葉入
洋裝美本紙數大約六百頁
定價上製金壹圓五拾錢。並製金壹圓貳拾錢。郵稅拾貳錢

幕政の末路攘夷鎖國論橫行の日に當り、獨り時流の外に立ち卓然として世論を排し娓々開國を唱導せしもの東に佐久間象山翁あり西に橫井小楠先生あり、共に是れ識力五洲の外に逸し眼光百載の後に徹するの人豪、而して象山翁の事蹟は嘖々として世の既に知る所、小楠先生の生涯に至ては未だ大に悉さゝるものなきにあらず、先生と親交ある故松平春嶽侯長岡護美子勝安芳伯由利公正子故元田永孚男等此に慨あり、慇懃に先生の遺子時雄氏に勸め其の遺墨の未だ甚だしく散佚せざるに及んで之を蒐收して一書と爲さしむ、小楠遺稿即ち是なり、嗚呼今世に在て苟くも濟世の策を講じ經國の務を談ぜんとするの士君子、請ふ一本を購ひ寒燈耿々の下試みに之を繙け、其の雜著に於ける文武一途之說海陸軍問答書富國强兵の二論處時變議其他數多の建白書等に接しては以て先生が當時に處する滿腹の經綸を窺ふに足るべく、其の幾多交友に寄するの尺牘に接しては以て先生が一世を推倒するの慨を見るに足るべく、其の家人に寄するの書に接しては以て先生が情緖の濃かなるを察するに足るべく、其旅行見聞錄遊學雜誌講義文章に接しては以て先生が萬古を開拓するの識見を知るに足るべく、其の東遊小稿小楠堂詩草に接しては以て先生が胸中綽々として閑日月あるを想見するに足るべし、而して讀者は更に眼光をして紙背に徹せしめよ、豈たゞ先生の經綸と性情とを知るのみならんや、亦た之に依て維新改革の因て來る所を悟り自から一部開國の歷史を讀むの看あらん、

再版發賣所　（五月十日製本出來）　東京京橋區日吉町四番地　民友社

かゝるやら、その騒ぎつたらホントにないんですよ。坊ちやまは愈よモゥ勘定しきれなくなつて、
『ヂョン、おつシ、〳〵、ヂョン、おつシ』
ツてヂョンをけしかけますと、ヂョンも腹が立つて〳〵たまらなかつたものと見えて、
『ウーワンワン、ウーワン、ワン〳〵〳〵〳〵』
精魂限り大きな聲をして吠へ立てましたが、雛つ子どもは耳がないか、一向平氣なもので、中には羽を叩いて、『イョうまいぞ隊長』なんて冷かしてるものさへありました。

小說

山情水思

半山隱士

常磐樹の緑滴らんばかり、枝に枝を重ね柯に柯を列ねたる木下蔭、澄みわたる空の月も、やう〳〵木の葉にふるはれて僅かに數條の光を漏すのみ、數歩前に歩みゆくメリー孃の姿は、衣帽の端々折々に微き光に隱見れす、
「メリー孃、卿の歩武は早すぎる、短かい足の東洋人には追いつきかねます。
此暗き林の中にても、さやかに美しと見らるべき白き容貌は、顧りて嫣然と笑みつ、
「も少し早くなさいませんか、倶樂部にはブラウン伯が待ちかねて居らつしやいませう。
「否、伯は今夜は英國公使の晩餐會に招かれたのですから、十時でなければ倶樂部へは來られますまい。
「十時、ならもう四十分ありますから、これから倶樂部まで五六分かゝり殘る三十分ばかりは待つとしませふ。
「否、精密にまだ一時間の餘あります、もう少し徐く

りなさい。

嬢は笑ひつゝなほ歩調をゆるめず、晩餐のチッキンを貪りたる余は、頻りと腹の張るを覺えてなほ散歩を望めども、嬢ははや散歩に飽けるやうにて、さつさと急ぐに詮方無く從ひゆけば、やがて公園の森の端に出でつ、夜の風光畵くが如き池の邊に來りぬ。

「メリー嬢、少しおまちなさい、僕は卿に聞きたいことがあります。

「何の事？

嬢はなほ歩調をゆるめず。

「卿が將來の希望は。

「希望つて。

「希望です、卿の願ふ所です。

「オホヽ、貴君また何か例の空想で御座いますか。

嬢は笑ひながら輕く聞きしが、歩調は少しく緩めり。

「否、空想じやありません、卿は僕がかゝる唐突な問を起したのを許して下さるならば、熱心に卿に問ひたいことがある、いや、わたしは常から卿に聞かふと願つて居ることがあるのです。

「でも仰山な、何なことを。

「それは卿の願望は如何いふこと。

「願望とは。

嬢の歩みはます／＼緩めり、月は中天に明かに、池の面は鏡の如く輝きて、木葉にそよぐ寒からぬ夜風、嬢の裾の襞の邊をさゝやく如く吹きわたれり。

「わたしは卿に就て抱いて居る疑問を言ひませうか。

「宜う御座いますとも、言つて御覽なさい。

「卿はこの米國に於て、名高い富豪家サンフオルド氏の愛娘、衣服、飲食、家屋、書籍、珍寶、珠玉凡そ天地間に金銀の力を以て得ることの出來るものは卿の得られぬといふものはない。殊にまた卿は有名なハアヴアード大學の學士であつて、卿の筆にされた文

章は今日の文士を凌ぐといはれ、大統領、國務卿を始めとして貴女紳士の交際到る處の夜會に招待を受け、交際塲裡の花として卿の面會を得、卿と一度の握手を願ふもの、何程といふ數は知れぬ位、さうすれば卿の境遇といふものは、欲うて得られぬものはなく、思うて遂げられぬとは無い、金力に飽き、學問に飽き、名譽に飽き、世の榮華人類の幸福は卿の身に得盡して居るやうに思はれる、その卿のやうな榮譽を得盡して居るものが、果して此上に何ものを望むであらう何事を欲ふであらうといふとは、わたしの常から疑つて居るところで、聞きたいと申したのはそこです。

孃は殆んど歩まざるに至れり。

「眞に無理な御疑ひじやありませんね。

囁く如く聞えしが、孃の長き睫毛の下清き瑠璃色の玉の如き眸は池の面に向ひ、月を浴びたる黄金のおくれ毛は、吹くとしもなき風にそよがれし雪より白き頬を拂へり。

「卿が此疑問を至當と思はるゝとすれば、その求めらるゝところは何ですか。

「あります。妾とて求むるとがあります……けれどもこの希望は、妾ばかりの希望ではありません。

「如何いふ希望ですか。

「日出づる國の、貴郎は紳士、貴郎のやうに學問に厚く道徳に高いお方は、定めし妾等の望には吃驚なさるで御座いませう、寧そお笑ひなさるかも知れません、妾とても自分ながらその愚かに驚きますもの、けれども貴郎、人は望なくしては一日も生くるものではありませんから。

「勿論です、その望は何ですか。

「それは耻かしい希望で御座います、妾の朋友は殆んど耻かしいとも思うて居りません、これは米國淑女

一般の熱心なる希望といつて宜う御座いますが、妾ばかりはこれを耻かしい希望と思つて居ります、さう思ひながらも妾の希望がやはり淑女一般の希望と同じものなのは仕方がありませんの。

「それですからその希望は何であるかとお聞き申したいので。

孃は俄かに氣つきし如く、忽ち色を改め、涼しき眼に溢るゝばかり笑湛えて、

「オヽ、知らずについ貴郎の甘言に乘つて、よしない事を、もう倶樂部に往く時刻になります、急いで參りませう。

と言ひつゝ、走るが如く歩み出しぬ。

中

「メリー孃の耻かしい希望とは何であらうか、僕は日本で一を聞いて十を知るの才ありと推賞せられたともある靑年、米國の一婦人が發した問題に對しては、忽ち之を解釋し得るの能力を失つてしまつた、之に對して實に數日間の考慮を費したけれども、何の得るところも無い、ブラウン伯、貴下はわたしのために之が解釋を與へて下さることが出來やうと思ひますが。

ブラウン伯は安樂椅子に倚り、シガアを吹きながら余の熱心なる問ひを聞き了り、何か心に不快を感じたらんやうにて、

「それは彼女の胸中の秘密だ、わが知り得る限りではない。

「否、獨り彼女の胸中の秘密ではなく、彼女自ら米國淑女一般の熱心なる希望だと言つて居ます、その一般の希望なるものが解せないのです。

「必ずあるだらう、けれど我輩は知らむ。

「貴下はメリー孃とは非常に親しい交際である以上は孃のいふ所にして貴下の解し得ないといふのは信じ

られません。

「非常に親しいとは何の意味で、?

ブラウン伯爵は眞面目に容を正してかく言へり、余はその眞面目の意外なるに驚きぬ。

「わたしは唯貴下と孃とが非常に親しいと思ふ。

「否、我輩は君に告白しやう、實は今孃と疎隔しやうと思うて居る。

「何故に。

「君の今いふ所のその耻かしき希望を以て迫られて居るから。

余は心にさては思へり、彼女の耻かしき希望とは、「戀」なりしならむ、即ち彼女は伯を戀ひせるなり、欲して遂げられぬと無く、求めて得られぬもの無しとは言へ、戀は金力を以ても權を以ても得難きものなり、彼女の希望とは「戀」なりけりと合點せしが、さて彼女はこを米國淑女一般の希望と言ひたれば、伯と彼女との間の戀には、果して米國淑女一般の希望と稱すべき意義を有するものあるにや、そは果して何ものなるべき、また伯は何故に學識あり名望あり財產あり容色あるこの絕世の佳人の戀を許さゞるにや、余は一たび解し得てさらにいよ〳〵解しがたくなりぬ。

「ブラウン伯、わたしは貴下の親友、またメリー孃の親友、貴下と孃との交際が永續せんとはわたしの熱心なる希望ながら、何故に貴下は孃に疎隔せんと望まるゝのです。

伯は默して答へざりき。シガアの烟は大なるパイプのさきに細くたなびきたり。

「私と貴下との交情は未だ長くはない、しかし御同樣に隔心なきとは殆ど百年知己の感があります、私は貴下が私に對して英國の貴族たるとを忘れて交つて居らるゝと信じ、私もまた自分が日本人たるとを忘れて貴下に對して居るのです、貴下は何故に私に秘

のすところがあるのでせうか。
かれはなほ黙して嘲けるさまなり。
「貴下が若し私を信じなければそれまでゞあるが、かりにも私が外國人たるを思はず、私を信じて貴下の胸中の秘密を知ることを許さるゝならば、私は貴下とメリー嬢との間に處する道もあらうと思ひます、或は貴下の大なる利益とならうと思ひます。
彼は突然と身を起して余が手を握りぬ。
「君、君は友情に厚い、我輩は君の友情にほだされて、自分の胸中に秘め置くべきことを、今は殘らずうち明けやう、君が我輩の彼女を遠ざけやうとする所以を止を得ないと察してくれるならば我輩の幸と思ふ。
彼は余を導いてその書齋に伴ひ入れ、テーブルの上に載せたる一の書面を取りて余に示しぬ。こはこれメリー嬢が美しきペンの跡なりけり。

親愛なるブラウン伯
妾がぶしつけなる申條に對して、郎君が特に懇ろなる返書賜はりたるは深く感謝の意を表しまいらす、さりながら御文意の妾の願ひに露だにかなはぬこといかにも悲しきことに存じ候かし、郎君は高貴なる英國の貴族にておはせば、門閥なき米國の婦女を娶りたまはぬとは、妾もとより知りながら、妾は郎君に嫁しがたき身なるが故にこそ、憚を忘れて郎君の許したまはんことを切に願ひまいらすなれ。自由に飽き、富に飽き、平等に飽きたる米國の婦女子は、今は階級を望み、爵位を望み、門閥を望みて、耐え難き想思に充ち居り候事、郎君は定めて知りたまふところにて候はむ。あはれ郎君の門閥と才學とを持ちたまひて、かゝる風潮ある米國に來りたまひしをば、妾が郎君の本心を誤りて、郎君の來遊は、夫人を此地に求めむためと、ひたすらに思ひたる、まことに妾

が淺はかなる心なりとは申しながら、さ思はせたまひし郎君こそ恨めしく存じ候へ、さりながら今は御心の程も明らかにては爲方もなくて候へば、あながちには申すまじく候はん、唯妾が郎君に別れまいらする最終の御會合にて、一事の願ふべきとの候へば、まげて今夕の十時、妾が邸まで御來臨の榮をたまはりたし可祝。

郎君を終生の友にと願ひし大膽なる

メリー、サンフオルド

余はこの書簡を見てその意外なるに驚きぬ。余は本國がなほ專制、爵位、門閥など階級の頑固なるを厭ひしために、米國に渡來して、そが自由平等の美しき氣を呼吸せるものなるに、圖り難きは世の人情なりき、自由平等の中心に生れたる米國の淑女は、なか〳〵に自由平等に飽きて、歐洲の爵位階級の究屈を慕へるとは、余はこの書面を見うりて、今まで天女なりし如く見えたるメリー孃の氣品の遽に低く下れるやうに感じたり。されど爵位をもて榮譽と誇るべきものとせるブラウン伯にそを言ふべきにはあらず。

「伯爵、貴下は兎に角今夕孃を訪うて、その最後の願の何であるかを聞かるゝ方が宜いでありませう。

「さう、自分もさう思ふ、がしかし我輩は決して富のみあつて門閥なき米國婦人を娶るとは出來ぬ。

下

夜を晝の如く輝かす電燈はブロードウエーの宏壯なる街區を一層壯嚴に觀し、縱橫に入り亂れて織るが如き馬車の中、一輛の美しき馬車は、南より北に向てブリタニア街の方に走れり、中には輕き裝の青年と盛美に裝ひたる淑女とあり、青年は余にして、淑女はメリー孃なり。

「今朝の新聞には驚きました。

「妾がブラウン伯を訴へたとを記いてありましたか

らで御座いませう。
「さうです、卿は伯と結婚の權利があると訴へたといふのは事實ですか。
「事實で御座います、確かな證據があります。
「わたしの本國などにては思ひ寄らぬ事です。
「さうで御座いませう米國では、男女が互に相愛する證據さへありませば、結婚の要求を法廷へ訴へる權利があるので御座います。
「卿は如何いふ證據をお持ちです？。
メリー孃はポッケットより一葉の寫眞を出せり、電燈の光に照し見れば、こはその寢室にてブラウン伯と相抱きて接吻せる寫眞なりける。あはれ伯は昨日まで孃を疎隔てんと余に語りながら、さては何時か孃の掌中のものとなりしか。
「ブラウン伯は眞正に卿を愛するのですか。
「愛があるに相違御座いません、さもなくて貴郎接吻して下さるものですか。
「それでは伯は結婚の意があるのですか。
「否、伯にその意がありまするなら、なんで法廷へ訴へませう。
「その筈です、わたしも伯がその意のないのは知つて居る。
「貴郎も？。
「先日伯から親しく理由を聞いて居ります。
「貴郎は妾と伯との關係を御存じで御座いますか。
「大概は知つて居ります、卿が此寫眞を如何して得られたかといふのが不審です。
「では貴郎は私が伯に最後の面會をもとめたことを御存じで？。
「知つとります、わたしは實に卿の手紙を見ました。
「それでは、何も彼も秘密をお話ししませう。
かくて馬車の戸をはたと閉め切りつ、低聲になりてメ

リー孃は語り出しぬ、馬は疾風の如く走りぬ、御者の鞭は電燈の光に玻璃窓を透して影ひらめけり。ブラウン伯は彼夜十時にメリー孃を訪ひたるに孃は一室に導きて、伯の歡心を得べきやう種々に説きたれど伯の聞くべくもあらぬに、さらば今はせん方なければ、せめての願には唯一回の接吻もて妾が切なる情思を遂げさせてよと迫りければ、さすがの伯も、それほどの容易き事だに拒まむ勇氣なかりしかば、それのみならばと許しけるを、孃はやがて伯をおのれが寢室に導き、伯を抱いて接吻せり、かねて窓掛の蔭に忍ばせ置きたる寫眞師は、此時コダック(輕便寫眞器)をもて手ばやく寫し撮りたるは、即ちかの寫眞なりけり。ブラウン伯は如何に孃を娶らざらんとするも、今は拒むに方便なく、孃は數月ならでブラウン伯爵夫人となり、英國の交際社會の花となり得るなり。余は此始終を聞き終りて、

「東洋人にはかゝる例を耳にすることが全くありません、想像の外なる事で、わたしは卿の幸運を祝ふの外、何といつて宜ろしいのか自分でもわかりません。

「妾がさきに恥かしい希望と申しましたは此事で御座います、歐洲の貴族の夫人となつて、交際社會に働いて見たいのは、米國女子一般の熱き希望で御座います、誰れも皆この希望を達しやうとしますには如何のやうなことをしてもと思ふので御座います、妾とてその例を學んだばかり、貴郎が高尚な思想でかやうな事をお聞きなすつて妾どもを卑しんで下さらぬやう願うております。

馬車はサンクオルド家の邸宅に達しぬ。孃は余を導き入れて、

「今晩は緩くりと遊んで居らつしやい、婚姻訴訟の勝利の前祝をいたしませうから。

こは數年前余が米國某府に滯留中、親しく遭ひたる事實なり、その後メリー孃は婚姻訴訟に勝ちて、ブラウン伯爵夫人となり、伯と共に英國に歸り、その美貌と才識とをもてやがて貴紳の間にもてはやされ、交際社會の女王とまでたゝへられぬ。またブラウン伯はこの夫人の內助によりて、英國政治界に位置をしめ勢力も加はり、數年前には苦々しき奇禍なりと思ひたる婚姻訴訟も、なか〳〵に一生の奇福と感じけりとなむ。

あはれ自由よ平等よと美しき社會の組織も、飽きては他の苦しと思ふ爵位階級の羈束の境遇を羨みのぞむに至りけり、爵位階級の羈束なくばと社會の組織に不平なる人多きこの世にも。

(完)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

應募兵

生田葵山人

さらばよし、いとしき母を養ふ鋤を捨てゝ、敵を屠る劍を取らんのみ。

死せしよと思はるゝ計り、天井の影を瞠りて、足を床に付けし儘、身動きだにせざりしカルナは。今迄熟慮の身を任せし寢臺より、恰も不可思議の杖の力に懸りし如く跳ね上りて。板敷の處々窪みたる床の上に突立ち上りぬ。二重瞼の清しき眼は、計り得られぬ魔力の潛み居りて、只に映じ來る周圍の物體を認むるのみならず、己が心內を往通ふ無形の影をも認め得る如く、爛々として輝き渡りて、花の如き唇の堅くもひきしまりたる、常に誰人にも温かき思を與ふる優しき影は露程だにもなくて、笑はゞ生血をも啜らん舌の現れ來るならんと思はるゝ迄、物凄くも恨みは深き無念なる思の現はれ居れり。ひり上る眉毛に昂まりし心の程を

示して、豐かなる頰は、今しも燃え上らん計りの熱き血にて紅に彩色られぬ。

人間とは斯く計り淺間敷き物なるか、弱き者を憐なる者とは誰人か定めし、强き者を麗しき物とは誰人か定めし、弱き者の血は、强者の光榮を誇る冠を飾る爲めに湧くものにあらざる事を知らぬ人は世にあらぬなるに、自由と平等の光を凡ての人類の胸に注ぎ入れて、自然の調和を幸福の内に求めよと常に叫び給ふ神の御聲は、西班牙國王の耳に入らざるなるか。

怪しき幻影の髣髴として眼の前に立ち居るを罵る如く、カルナは再び高く叫びて、猶も堪えやらぬ悲憤の恨を、恰も人の面を擲つ如く、虚空に向て高く差し上げし右の腕二度三度打振りて跳り上りぬ。

○

さゝやかなる硝子窓を通して、美しき星の光見ゆ、惡魔や潜むと思はるゝ黑き森は、サタンの眠ると思はるゝ黑き森と、折重なり、繞き合て、其間に處々睨むが如く燈の洩るゝは、烟草畑に働きし晝の勞を休むる村人の草屋ぞかし。水車幾つとなく懸けたるエーネ川は、此處よりは星影流す優しさは眼に入り來らずして、恰も意地くね惡き銀蛇の迂るが如く長く白く流れて、戀の歌囁く水の音さへ聞えず、風の出でしならん、扉の軋る音聞えぬ。

室内には米國製よと見ゆる少さき洋燈の、油少なきにも係はらず、油煙黑く燈筒を燻ぼらして、譬喩ふれば不平の遺塲を求むる如くドンヨリと四邊を照らしぬ、蝶番の外れたる戸棚、古ぼけし卓一脚、其隣に据へられある形ばかりなる書籍箱、煤に塗れて底光りする畫額一枚、之等は眼に映り來る重なる財産なれども、不思議にも書籍箱には、多くの書籍の積み重なりて、卓の上には半ば開かれて、主人の來り讀むを待つもあり。

暫しが間は、床より根生へし石像よと思はるゝ迄、折

く何事をか口の内に獨言ながら突立ち居たりしが、軈て歩を移して室内を、恰も悲憤の辛らさを押ふる如く、緩やかに歩み初たりしが、不圖何物にか驚かされし樣なる眼付の、眞實己が周圍を取卷く敵のある如く四邊を見廻したりしが、再び顔を低れて歩み始めぬ、何をかカルナは沈吟せる。

さらばよし、いとしき母を養ふ鋤を捨てゝ、敵を屠る劍を取らんのみと、又も高く叫びたるカルナは、突と顔を持上げて、或る慰藉を求むる如く急ぎ窓の方へ進みより、ひたと計り顔を硝子に押付けて外面を見廻しぬ、此時風は稍烈しくなりて、物音は扉の軋りのみならず、怪しく樹木の叫ぶ聲も交りて、彼方此方に見ゆる燈の光は、吹き散り行かん樣に見へぬ。

眺むるともなしに、右より左に、左より右に、見回し眺め回せしカルナの眼よりは、見る見る熱き涙の泫然として溢れ出で、ほとほと倒れん計りに咽びたりしが、片手にしかと窓の横木を握り居れり。

優しき情に包まれていつまでも醒めぬ春を夢みる、リノの村里に、浮世のつらき風は、よしや荒野の果迄も、渦卷き逆卷き吹き渡るとも、此の村へは吹き寄すまじ、イマリ歌ふ村乙女の麗はしき聲ばかりにても、惡魔の心は和らぎて、永き平和の夢は續くならんと、其初め此處へ出稼に來りし時、胸に畫きし思も、今は空想の影に終りし無念さよ、やがて寄せ來る砲煙彈雨、淸きレチ河に罪を誇る醜き血は流れて、枝もたはゝに實るバナヽ樹の下には、深傷に苦しむ兵士の呻吟を聞くに至らん、憎きは、兵力を弄して我國を奴隷の鎖につながんとする西班牙國よ。

斯く獨言きしカルナの眼には、何處よりともなく、恐ろしき惡魔の姿の現はれ來りて、罪惡、悲慘、痛恨、獰猛と、總て見るも厭なる汚れたる文字を、愛するリノ村の地の底深く埋める樣に思はるゝ計りか、もしも理

めし文字の孰れに向ても、一度火を燃やし付くれば、恐ろしき熖は、瞬たく間にリノの全村を包みて灰燼と爲す可しと、――カルノの顏を眺めて、冷笑ひながら惡魔は冷語を放つと思はれて、身も心も搔むしらるゝ樣なる口惜しさ、殆ど正義なるものは消へ失せて、世は惡魔の手に落ちしよと迄思はれしに、不圖熱したる頭腦の幻影は、今宵斯迄も心を爛らし、悲憤の涙に咽せばさしめたる、新たに村端を立ちたりし建札の書き出されて、文字の末に至る迄も、恰も闇の中に火をもて畫きたらん樣に確然として現はれ來りぬ。

奴隷の鐵鎖を斷ち切らん爲めに、血を絞りて築きたる砦は、兵力の不足よりして敢なくも敵の手に奪はれぬ。

奴隷の鐵鎖を斷ち切らん爲めに、勇ましく戰ひし同胞の屍は、兵力の不足よりして我手に收むるを得ざりき。

神は自由と平等とを總ての人類に與へ給へり、正義は神の與へし給ふ道なり、獨立軍は、玖巴國の名譽を重んじて、惡魔と戰はんが爲めに、更らに兵員を募る、

血にて書せし文字なり、涙の淵に沈みし後、初めて味い得らるゝ文字なり。カルナの頭腦は破れん計り一層、愛國の熱に燃え上りぬ、我等は西班牙の國民と共に、神の支配の下に動く人類のみ、西班牙の國民の神より自由と平等とを得たる如く、玖巴の國民も、神より自由と平等とを得たり、二者の間に、壓制、侮辱、奴隷と、優劣を意味する言葉は置く可からざるなり。」されで智惠足らぬ人間の計り難き自然の掟は、世に强者と弱者との區別ある存在を許しぬ、弱者は强者に服從せざる可からず、强者は弱者を愛ざる可らず、我等は弱者として産れ來りし是非なさに、强者なる西班牙國の下に服從したり、服從して西班牙國の敎の旨に從ひ

ぬ、而して西班牙國は服從したる玖巴國に何物をか與へし、文明か、美術か、將、美はしき道義なるか、願ふらくは指を屈して數へ上げよかし。

神にも知し召さん、西班牙國の玖巴國に與へしものは、計り知られざる罪を包む、痛苦と、屈辱のみなり、誰ぞ重税を課して耕地を荒らしたるものは、誰ぞ生活の困難より夫婦間の愛情を冷やかにせしものは、彼等の唯一なる功名は、夢みるが如き長閑けき玖巴人に、賤しき佞辨と、阿諛と、狡智と、邪智とを應用す可き智識を與へしのみ、彼等の飽くなき慾心を滿たす征服の口實の文明の輸入とは、只智力にも、生活にも相當せざる奢侈の念を、自然を樂む玖巴人の胸に注ぎ込みて、慾望に煩悶する苦を與へしのみ、さるに猶西班牙人は我等に文明の智識を與へしと云い得るか。

弱者として盡す可き道は、我等の盡し得らるゝ限り盡したり、弱者として忍ぶ可き事柄は、忍び得らるゝ限り涙を呑んで忍びたり。さるに何事ぞ猶其上に求む、玖巴人は、自ら求めし西班牙國民の苦痛を分擔せざる可らずとの約束を有せず、玖巴人の生くるは西班牙人の爲めに生くるにあらず、彼等の頭腦には、壓制、奴隷なる文字は、砂の上に書き得る物と考へ居るならんか、苦痛、怨恨、忿怒、なる言葉の動を、西班牙人は知らざるなるか、悪魔よ、サタンよ、總て人類の神より受けし自由と、平等とを否認して、人類を動物の鐵鎖に繋がんとす。

何にか譬ふ可き、小羊を掌上に弄して、始めは鼻を痒ぐり、石を口中に投げ込む悪戯にて滿足したりしも、己が意の儘になる面白さは、一歩一歩殘忍に進ませて、齒を拔き、生爪を剝かす果ては、刄を腹部に當てゝ腸を割き、胃を破りしならばと迄思ひ付きし悪童なり、よしや其心中に腸を割き、胃を破るは、殺戮し果つるとは心附かずして、夢の如く生き回らん樣なる

思ひを抱くとも、小羊の身にしては涙の極なり、痛苦の極なり、死力を盡して爭鬪ふに何の不思議かあらん、而かも悪童は腸を割きし後、流るゝ血潮の止まるを見て、始めて生命を奪ひしよと心附くとも、呼びしとて回らぬ魂よと思へば、其儘片側の池中に投ずるに、一滴の涙を落す可きかは、玖巴國は悪童の掌上に弄せらるゝ小羊なり、退て辱かしめの鎖の下に餓死を見んよりは、進んで刃を提げ、一人の敵なりとも殺し得て戰塲に死骸を曝さん我等の心、神も憐れと見給ふならん。

悲憤慷慨の情に堪えざるカルノは、敵の陣營、味方の敗北の狀態、さては草原に炎々散在せる死骸の涙より、飜て己が傭主なる人の家居の樣など、其から其と間斷なく幻影を浮かべたりしが、不圖重傷負ひし勇士を介抱する看護婦の畫き出されたる、連想は突と外れて、先き程より心の底に思の糸を操りし慈愛深き母の面影の麗はしくも浮び來りぬ。カルノが繰回し繰回し念頭に思ひ煩ひて、猶も決し兼たる苦しみは、只此の母のあればなり。

誰にも湧く青年の若き血潮はカルノの身にも、敵は昨日何處迄、進み來りぬ、獨立軍の兵士は力の限り戰ひたり、合戰の手初めは都合よかりしも、雨降り來りし黄昏頃には、味方の兵士の半ばは數へられざりき、敵は何州へ亂れ入りて、婦女は辱められたり、味方は新に兵力を完備して擊て出んとすと、斯る消息を聞く度毎に跳り狂ひて、ほとほと心臟も破裂するやと思はるゝ計り、半夜衾を蹴て夢心に戶外を逸走せし事もありしかど、我ある故に生甲斐ありと云ふ母の、己が出稼ぎするリノ村を遠く離れて海邊の故郷に、而かも不具なる身體は我の送くる勞銀にて僅かに生活し行くに心附き、無念の涙を忍びて、今日が日迄押へ來りしなり。

許し給はれよ母、昨日の戰は獨立軍の根底をも動揺さん計りの敗北なりと聞く、惡魔とも惡鬼とも假令難なき敵は、勢に乘じて夜叉の如き殘酷なる劍を閃めかして、優しき同胞の咽喉に擬すると聞く、今迄の戰、リーノの村に住んで銃を握り、劍を握り得らるゝ男子の半ば以上は出陣しぬ、仲には頭に霜を頂きて銃を荷ふ肩骨の折れもやすらんと思はる老爺も交り居りぬ、花の如き顏の露や滴らんと思はるゝ淸き眼を母と、姉に向けてさらばと一聲、勇ましくも劍を帶びて進み行きし朋友も見受けぬ。其都度我も共に行かましと、土に喰ひ付きて泣きし事幾度ぞ、レーチ河に映る美くしき月の影眺めては、白き光に裝はるゝ戰塲の光景の思起され、去て優しき母上の面影を忍び起さるゝ時の悲しさは、親一人子一人、我ならで世に不自由を感ぜらるゝ方を介抱する者は誰かある、戰塲は死するを光榮の塲所の、我死にもせば、餓死や爲給ふならんと思はれて、卑怯者と陰にて罵るゝ人のあるをも厭はず、女々しき奴よと笑ふ人のありしをも知らず顏に空しく鳴る腕を摩りて、殘る婦女子老幼と共に今日が日迄田を耕し、收穫を急ぎて、せめての心遣りに、內需品に事は欠さじものと、我身體たけに働らき暮らしたりしも、昨日建てられし募兵の建札、リーノの村の事情は我よりも募兵官こそ悉しく知り居るならんに。

許し給はれよ母、我は母を養ふ鋤を捨てゝ、敵を屠らん銃と劍とを取らんと決心しぬ。一死只玖巴國に奉ぜんのみ、血のあらん限り、骨のあらん限、前に進んで、敵を屠らんのみ、屠つて正義の劍の下には、譬難なき靈現の潜み居るを示して、惡逆の罪より悔い改む可き恐怖心を與へんと思ふのみ、慈愛深き母を捨てしめし敵の殘酷さに報ふ可き血を、我は我の握らんとする劍の上に見ん事を希ふ。

風は愈烈しく、山も河も森も田畑も、只啾々と鳴り

渡り、ペナ、樹は倒れ椰子は叫び、跳り上り叫び狂ひて天地も覆らん斗り、暗雲闇を包みて、燈は總て滅しぬ、恰も戟を提ぐイスラの神の横行して、リノの村人の胸に、血を樂しみ、殘忍を恐れぬ勇氣を吹き入るゝ如く、物凄まじくも闇から闇に吹き荒びぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

募兵の役人は明日の朝此村に來りて、村端れの建札の下に集まりし人數を調ふるなり、せめてもの遺品にと、頭髪切りし髮の壹束、斯く決心せし次第を書きし書狀の一通の、今日より三日目の夕暮、カルノの母に達せし時、母は如何に思ふならん、母も玖巴人なり。

（完）

雜錄

女子の書簡文（四）

附　袈裟の遺書きの事。
　　大高源吾の母に遣りし書の事。

伊那六民

予は、前號の紙上において『源平盛衰記』中の俊寛僧都の女の消息文を紹介したるが、なほ、その書に見えたる袈裟の最後に臨みて母にかき遺したる文をはぶくべからざることを信ず。これもまた、疑ふらくはその著者の筆に成りしものなるべけれど、また、往時の文體を看るに足るべければ、その誰の筆なるかを論ぜずして可なり。

その文は、

袈裟の遺書

さらぬだにも、（何事もなくてただの意）女は罪深し

とうけたまはりはべるに、憂き身のゆゑに、あまたの人の失せぬべければ、わが身ひとつをうしなひ候ひぬ』（以上第一段）ひとり殘り留りおはしまして歎きおぼしめさんことこそ痛はしく（思ひ）はべれ。何事もしかるべきことゝ申しながら『かく死ぬることは前世の約束にはあらんか』、さきだちまゐらせぬる悲しさよ。相かまへて、（かならずの意。）後の世よく弔ひてたまはらん。佛になりはべりなば、母御前をも、渡（袈裟の夫渡邊渡）をも、かならず迎へ奉るべし。』（以上第二段）よろづこまかに申したくはべれども、落る涙だに水莖のあと見えわかず。』（以上第三段）

露ふかき淺茅が原に迷ふ身の、
いとゞ暗路に入るぞかなしき』。

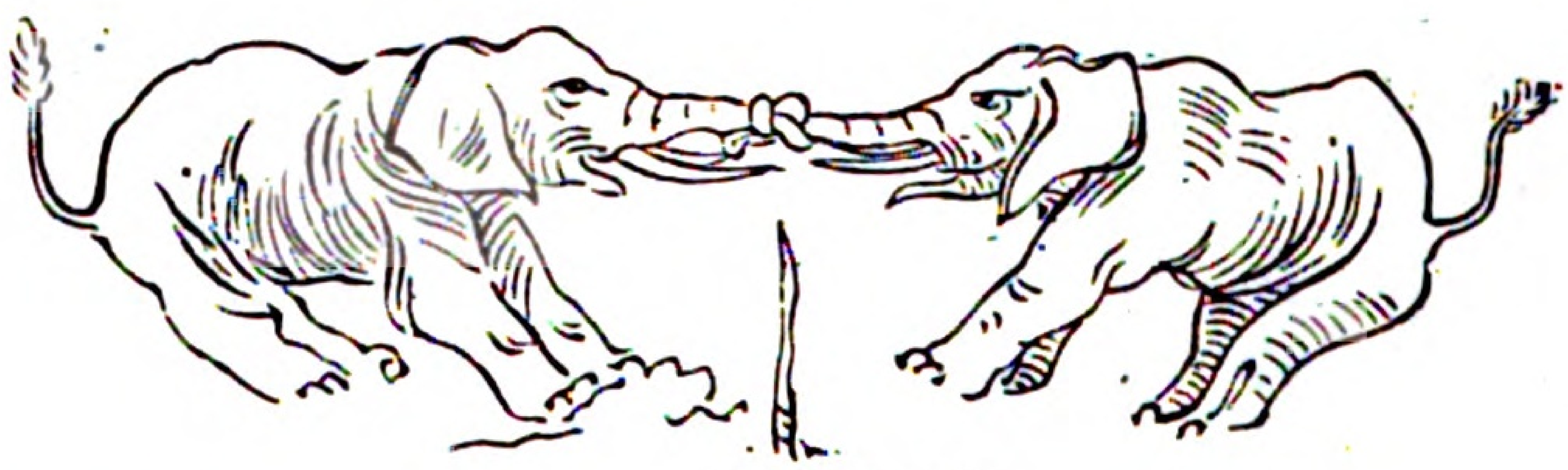
この文、起首、たゞちに、さらぬだに云々と筆を着けたる、事の急なるほどの作にて、殊には、死を急ぎてのことなれば、これを以て書簡文の體を失ひたるものといふべからず。いはゆる短刀直入といふものにて、かの木村重成の室の遺書の、一樹の陰、一河の流云々と筆をおこしたると同じ例にて、げにもさし迫りたる當時のありさまを見るなり。極めて接近したる人におくる消息はこれを例とすべし。ことさらめきて、前置したるはなか〳〵に見にくきものなり。第二段、よく情をつくし、第三段、「落る涙に水莖のあと見えわかず」とて和歌を添へたる、殊にあはれを覺ゆ。この文の如きは、實に簡潔にして情を盡したるものといふべし。この簡潔にして情を盡し、しかも、一點の心を紊したる跡を見ざるところ、これ袈裟の筆にはあらずして、『盛衰記』の著者の筆に成りしものと疑はしむる第一の理由なり。

されど、ともかくも、名文たるとは失はぬなり。この文にても、

うしなひ候ひぬ。　痛はしくはべれ。
悲しさよ。　弔ひてたまはらん。
迎へ奉るべし。　見えわかず。

などの句の結びざまに注意すべし。かくても、決して、書簡文の體をば失はぬなり。

予は、これまでは、専ら、女子の書簡文をのみ擧げつれど、これよりをりに觸れて、男子のをも掲げんとす。いふまでもなく、女子に關係わり、且女子の文章の摸範とするに足るものをえらびて、一つには作文の材料にも備へ、一つには、修養の裨補にもとて、殊に精神を籠めてしたゝめつらんと覺ゆるものを示すなり。


爭ひのはじめ

予が、文に批評を加へ、且、句を練り想を凝したるものにあらざるものに對ひてその誤謬を指摘するが如きはまことに、古人に禮を缺きて、心苦しき限にはあれどこれはた學問界の研鑽の一端として、泉下の人に宥恕を乞ひ、併せて、讀者のこの文を輕〳〵しく看過すことなからんことを切望するなり。

さて、茲に掲げんとするは、有名なる赤穂義士の一人なる大高源吾が、仇の家に討ち入らんとせし數日前に故郷なるその母に遣りし消息文なり。義士等が復讐は、世の人のすべて熟知することなれば、今茲に何事をかかき加へむ。たゞ讀者が、みつからをその作筆者の境遇におきて、その事情を迎へ察して讀まんことをねがふのみなり。

大高源吾の故郷の母におくりし書

たしかなるたよりにて御坐（二字削るをよしとす）
候まゝ申上まゐらせ候』（以上消息のかきだしなり。）

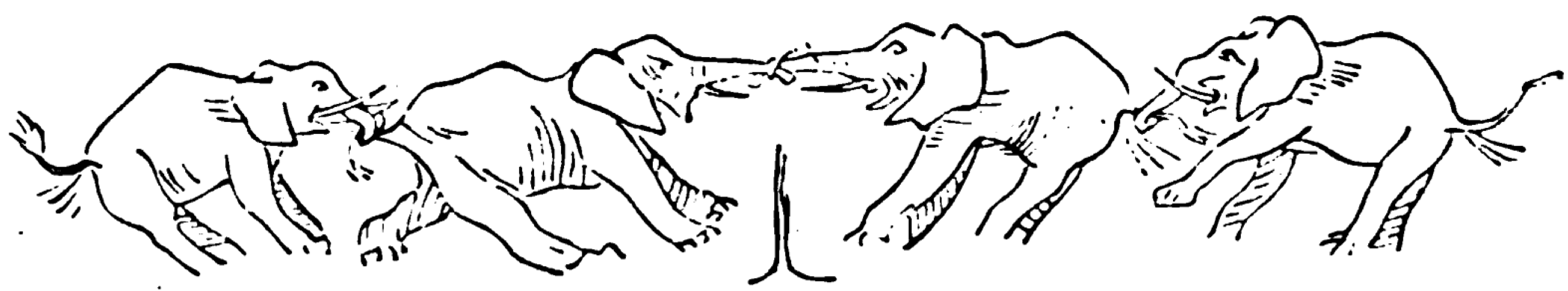
先々、ことの外さむさに御坐候。寒に入り候て、そこもとさやうに御坐候はんと存じたてまつり候。御前様いよ／＼御そくさいに御坐あそばし候や、御持病もおこり申さず（おこらずと改むるをよしとす）。御くらしあそばし候や、そのゝち久々御たよりも御坐（削る）なく、さて／＼御心もとなく存じ奉り候。こゝもとかはることも御坐なく候まゝ（かはることともなく候ゆゑと改むるをよしとす）、御心安く思しめされ下さるべく候。十内様（小野寺十内）、幸右衛門（十内の子）、金右衛門（岡野金右衛門）いづれも／＼そくさいに居まゐらせ候まゝ（くらしをり候ゆゑといふやうに改むるをよしとす）。御氣づかひあそばされ下さるまじく候』。（以上さき方の安否をとひ、又わが方の動靜を報ず。遠き方におくる消息には必かくの如くすべし。）』

そこもと、只今は殿様（に）御つきあそばし、よほど間も御坐候まゝ、町方もしづまり申すべく候。加兵衛などもいかがくらし申候ことにて御坐候かとぞんじまゐらせ候。』

一、京にても、おたん様御事、今ほどは、綾の小路かね澤近所へ御こしなされ候よし、一段の御事にぞんじまゐらせ候。そこもとへも、たより不自由に御坐候はんまゝ、せつ／＼たがひの御たよりも御坐あるまじくと存じ奉り候。（通例あるまじと存じと、く文字を省くべきなり。たゞし、あるまじくを文法上さしつかえなしとするには、「あるまじくおはする事とぞんし」との如く、「あるまじく」の下に何かことばの省畧せられたるものと見るべし。おはすることなどゝあらため見んときは、「御坐あるまじく」の御坐を削り去るべきなり。しからずば、こゝは重複しておもしろからず。）

一、田井村にて、かゝ様御事いかゞ御くらしなされ

候か、先度仰せ下され候御文のとほりにては、(仰せ下され候ひし、又は、下され候ひつるなどゝ改むべし)。さぞ〳〵御難儀と御いとおしう(いとほしうとあるべし。)ぞんじまゐらせ候。文して申し上ぐべく候得共、(候へどもと改むべし。さぶらふといふことばは、文法上にては、四段の活のことばとて「さぶらは」「さぶらひ」「さぶらふ」「さぶらへ」と活動することばなるゆゑ、「候得ども」候えども＝とは書くことの出來ぬことなり。この誤謬は最多く行はるゝものなればよく〳〵注意すべし。)御



爭ひのなかば

讀みなされ候こともいかゞと、わざとひかへ申し候。かならずよろしく仰せられ下さるべく候。くれ〳〵賴み奉り候。

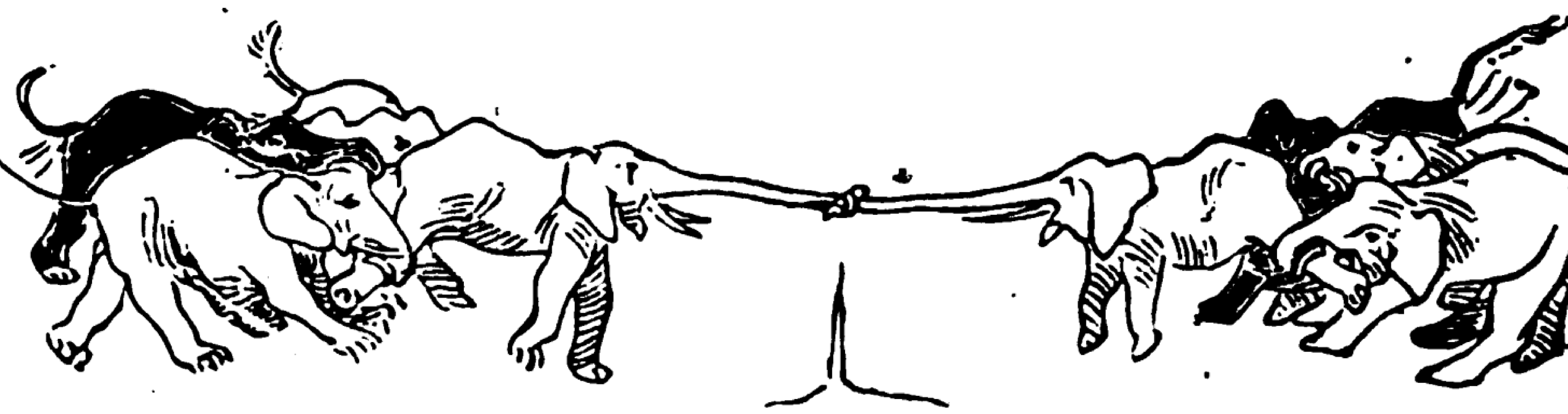
一、御千代こと、さだめて、もはや岡山へ御ひきとり候はんとぞんじまゐらせ候。文つかはし申し候まゝ、たしかなるたよりに御遣し下さるべく候。(以上さき方につきていへり。以下わが方のことを述ぶ。消息文はかならずかくの如くならでは體を成さぬなり。わが方のみを擧ぐるは禮を失ふものなり。心すべきことにこそ。)

一、内々の大事(復讐のこと)もいよ〳〵しゆびよく御坐(二字削る)候て、もはや二三日中にうち申すことに御坐候(二字削る)。是までは、八まん大ぼさつ、くわんぜおんぼさつの御守りにて、存じの外たやすくらちあき申し候。(「らちあき候ひぬ」又は「らちあき申して候」とやうに改むべきなり。)うちこみ

《吉良家へ》候ての本望とげ申す段、あはれ〳〵、思ふまゝにあれかしと願ひ申し候。《此の段より、漸く滿腔の精神を寫し出せり。筆の勢にはかに昂り來る。》今更何事を申し上ぐべき事も御坐なく候」。《しかれども、言はんと欲することをいふ能はず。作者の胸中想ひやるべし。》これかぎりの文にて御坐候」。《情せまりて、唯此の一句無量の感慨を含む。作者も此處に至りて、必潸々として涕をおとししならん。》何れの事も、みな〳〵前世の約束と思しめし、いたみ御なげきあそばさるまじく候」《御なげきあそはさるまじくと書きつる作者のなげきはいかばかりなりけん。》何ぞ此の節まで手なれ候ものかたみおくりあげ申したく候へども、衣類等のやうなるものは遣しがたく、《よりて、》あまりに垢つき候まゝ（まゝは、ゆゑなどゝ改むべきなり。まゝといふは、まに〳〵といふ意なり。女子の書簡には、よくある誤謬なり。）こゝもとにて、ともかくもいたし申すべく候《武士の用意はかくありたくこそ》膚につけ申し候ものにて、御坐候まゝ（候まゝと改むべし。）、守袋進じまゐらせ候」。《孝子の心》まことに〳〵、《一句人を動かす》さき立ちまゐらせ候不孝の罪、後の世もおそろしく存じ奉り候へども、全く、私事に棄て候命ならず候まゝ、其の罪は御ゆるし下され、たゞ〳〵、とにもかくにも、深くおん歎きあそばされず、御念佛賴み奉り候。」《めゝしきこと、ふと見ては婦人の如し。これ却りて人情の至極。たゞにかよわきばかりのとは霄壤のたがひあり。味ひて知るべし。》

一、私最後のいでたち《これ勇士の本色。文に活氣あり。》下に着こみ綿入れ候て、黒股引、きやはん、いづれも〳〵、鎖すねあて入れ申し候。黒きしころ頭巾はちがね入れ候て、うは着は黒きとびさや《に

て』綿入もみうらの小袖着し、帯(は)黒き五重まはり『にて』くさり入り、かたなは、おやぢ様の御さしなされ候刀(候ひし又は候ひつる刀などと改むべし。)にて御坐候。(にて候と改むべし。)はのわたり二尺三寸ほど御坐候。(ほどに候。又はほどにて候などゝ改むべし。)大長刀持ち申し候。(かくの如く身の装束を十分にせしゆゑは)此のたびの事とぞんじ、『それゆゑ』心のまゝに出でたち申し候。『孝子の面目を母は涙のうちに想ひ浮べて讀みつらん。』人にすぐれしはたらき仕るべく候と、あつぱれい



爭のはてはかくの通り

さみ申し候まゝ、此の段、すこしも〳〵御氣づかひあそばし下さるまじく候。『わたくしのみならず』幸右衛門、金右衛門、いづれも〳〵、思ひ〳〵の事にて、『それ〳〵相應に身じたく仕り候。』『幸右衛門金右衛門の上をもいふ、この心決して忘るべからず。このくだりを欠きたらんには、いたく大高源吾その人の品格を損すべし。消息書かんものは、意のくまなく行きわたらんことを要す。』さて、私こと、金の短冊にめうじ書きしるし、かたおもてには、じせい書きつけ申し候。(申して候と)

山をさくちからも折れて松の雪

右の通りいたし『て』さげ申し候。『やさしく美しき限。』いはれぬことながら、せめてのことにと書きつけ、進じ申し候。』此のばの文にて候まゝ(候ゆゑ)、わざと、外の事『は』申し上げず。何も申し上ぐべきことも御坐なく候。(なく候と改むべし。)たゞ〳〵御

名殘惜しく存じ奉り候。（悲哀なる辭を以て結ばず、これ母の心を傷めんことを恐れてなり。たゞ〳〵御名殘をしくの一句さすがに人情をはなれず。實に讀者をして酸鼻にたへずこの文を繰り返すこと能はざらしむ。）

壬午十二月七日　　大高源吾

母御人様

かへす〳〵、せつかく御身の御養生大事に遊ばされ下さるべく候。』かくうらめしき世の中とおぼしめし御身も棄てはてなされ候事、（なされ候はんおんことなどゝやうに改むべし。）ゆめ〳〵御坐あるまじく候』。金右衛門『の』かゝ様へも、『あはれとも、〳〵』くれ〴〵このこと仰せらるべく候。うばへもたのみまゐらせ候。『うばへもの一句、まことに、あはれに、やさしく、かなしく、評者實に卷を掩ひてまたゝび涙を拭ひたり。』かしく。（かしことすべし。）

この文、文章の組織といひ、筆のすなほなることゝいひ、まことに好き摸範とするに足る。筆のやわらかきが中にも、さすがに、凜然として犯すべからざる氣象ありて、其の庭訓のほども想ひやらる。はしめの方に、種々の用事を述べ、をはりて、「内々の大事も、いよ〳〵首尾よく御坐候て云々」とやう〳〵主意に移り、遺品のことより、身後の衣類などの處置のことをも、毫釐ものこすかたなく書し、母の歎を察して、「とにもかくにも深く御歎きあそばされず」にと、討死の已むべからざることを、つまびらかに解説して母を慰め、更に、討入の裝束のさまを、殊にくはしく、花やかにしたゝめて、母をも勇めはげまし、自らも勵み、俳句をさへ添へて、ひときは大和武士の情操を示したるなど、實に鬼神をも泣かしむるものといふべし。殊には、金右衛門幸右衛門などの上をも、常に心に離さず。且副啓のところの、繰り回して情を述べたるなど、用意の周

密なること、これを婦人の平生の行爲の龜鑑とせんも可ならずやは、たゞに作文の摸範たるのみにはあらざるなり。

次號には、吉田松蔭が、その妹に與へし文簡を紹介すべし。

巴里見聞記

てふ生

前便御落掌遊ばされ候や、今回は巴里市民の日常に就て聊か申上ぐるところ有之べく候、

小生は彼等が何時も如何にも樂しそうに致し居り候を好み候、彼等は芝居に參り候ても無暗に喝采致し無暗に叱責致し殆んど他から見れば氣狂の如くに御座候。彼等が馬車に乘りて公園地を飛び廻り候時は、實に中心溢るゝばかりの悦びを如何にして洩らしてんかと思ひ居り候ものゝ如くに御座候。小生がはじめ倫敦に滯留致し候て其の公園地を逍遙致し、翌日巴里に參り候て又公園地へ出掛け候處、恰かも黑暗から急に明るき處へ出でたるが如き心地致し候。小生は彼等の悦ばしげなる顔を見ては自身も破顔一番せざるを得ず、左に向き右に振り返りて、足も自然に躍り上り申候。

日本にては東男に京女郎と申し候へども、當地にては倫敦男に巴里女郎とや申し候べき。倫敦ほど男子の美しくして品格よきは無之、而して巴里ほど又女の美しくして愛嬌あるものは無御座候。其の代り巴里の男子と來たら御話には相成りがたく、倫敦女の野暮に至つては申すも誠に野暮に御座候。小生は決して西洋カブレに相成り候て譯もなく女尊男卑を唱へ候ものには御座候はねど、巴里人士の現狀を見候時は、實に癪にさわつてたまらぬもの有之候。彼等は平生婦人を尊び婦人を敬ひ婦人のためとし云へば靴の紐をも解き候へども、其は全く外表ばかりの禮讓か又は爲めにする所

今回は是れにて御免蒙るべく、故園の山川に面白き事など有之候はゞ、何卒御洩らし下され度候。

早々頓首、

蠻風夷俗

乾坤

南洋の土人は椰子實を稱して天の乳房といふとかや、人類の生活に必須なる食物は世界至る所にありて然かも人類の住める所として是れを產せずといふとなし、熱帶地方には淡泊なる果物野菜多くして清凉齒牙に香はしく寒帶地方に濃厚なる獸肉若しくは脂肪に富める食料饒くして自から防寒の料となるがごとし、廣ろき世界に數多き蠻貊の國々風俗習慣の異なれるが中にも生活の狀態に就て仔細に觀るときは其間に自から一致のおもむきあるこそ奇妙なれ。

中央亞弗利加の暗黑ザンヂバル地方の土人は玉蜀黍を以て常食となすこと恰も吾人が米麥に於けるが如しといふ、而して其地は赤道直下を距ること遠からざるの熱帶圏にあるを以て播種後二ヶ月を以てよく成熟し、週年四回の收穫を爲す、而して其の調理法は是れを鐵製の大釜中に投じ水を加へ熟煮して糜粥となし是を食ふに箸なく匙なく唯食指を以て食ふ、森林をあされば蕈あり、蕨あり、赤野鷄、野羊あり、象、水牛の屬あり、蛇、鰐魚の屬あり皆以て食料に充つ亞弗利加內地にある森林地方の蕨は長さ一丈五尺に及ぶものありて莖の太さ十二サンチの山砲の圍りにも比すべき程なりと云ふ、蕈も又頗る大にして蓋の周圍二丈餘に上り幹の太さ二抱へに及ぶものありて本邦櫻島の大根の大なるも到底比較にはたらざるなりと、されば若し土人が森林中を渉獵して一個の蕈を得んか如何に大食の蠻種といへども是を食して三日間の糧に剩るといふ。而して其稍進化したる部落に於ては、芭蕉の實を取り、

馬鈴薯、小麥の類を植ゑて穀食しマニオクと稱する植物の根を掘り製して食ふ。

南洋サンドヰッチ諸島の土人は輓近歐亞大陸諸國の人種と交際を開くに至りて以來頗る開明の域に進み、海岸附近の土民の生活は甚だしく文明人と異る處なきも純粹の土人が常食となすものは重にタローと稱する芋類の一種なるが此芋は四時共に間斷なく水田に生殖するよしにて形狀は我國の里芋に似て稍しく大なり、土人は此の芋を十分に熟炙したるを取りて皮を剝ぎ蒲鉾形に切りて皿に盛り以て賓客に供す、其味は頗る甘味にして且つ粘氣多く恰も我國のきぬかつぎのごとしとなん、今其の炙方を聞くに先づ地盤を二尺許堀下げて其中に火を燃やし、穴の暖まる頃火熱と均しきまでに熱したる燒石を穴の中程に至るまで投入し其上へ芭蕉の葉を敷きて芋を積み更らに芭蕉葉にて是を蔽ひ倘其上に土を盛り薪を焚くこと二十分許り其れより熱氣の消却するを待ちて之を掘り出し調理するなりと、土言に是れを稱してポイと云ふ、而して土人が是のポイを食する時は之を椀に盛り食指と拇指の二本にて摘み取り絕へて匙箸の類を用ゆる事なしといふ。

極北芬蘭の土人が日常の食物は大抵鹿肉、海豹、鯨、及び乾枯せしめたる魚類、諸種の海禽類、尤も好みて食する獸脂等なるが、彼等が生活冬季には深山に入りて獸類を狩り來り其肉を食料に充て其皮毛を白人に賣り、是れを以て衣類、麥粉、野菜、煙草及び時としては酒類彈藥と交易するなり、而して此等土人の住居は大抵夏は天幕を張りて住ひ冬季は土窟若しくは雪窟に作りて居常獸脂を燃して燈火となし間々沿岸にして材木に富める地方に於てはサガレン土人の如く丸太木を組みて家を作るあり、彼等の中年中海獵を以て生計するものは其の食する所專ら海馬、鯨、河豚の類にして是れを食するに當つて敢て割烹する事なく皆生肉の

ま丶、若しくは凍躰の儘にて食用に供す而して是を食するに勿論肉叉匙箸等の食器を使用する事あらざるなり、殊に其の鯨肉の如きは赤き肉の部分は凍躰となし脂肪部は壓窄して液汁を作り、其の凍肉を食する際脂肪に浸して喫するなり、是れ恰も本邦人の指身を食ふに醤油若しくは酢に浸して食ふがごとし、唯其の異なる所は我れにあつては食味を助け彼れにあつては其の躰温を保持するの必要に出づるの相違あるのみ。

新規尼亞の土人は通例椰子の實を以て常食し之れに副ふるに匏菓、香蕉、眞瓜、西瓜等種々なる菓物を以てし、海濱にある土人は魚類を捕りて炙食す、椰子を製するの法はまづ實を樹より卸ろして之を海濱の砂塲へならべ、數日間太陽の光りに曝らし置く時は核内に包容されたる水液は凝結して一個の芋頭の如き塊をなすに至る、依て其の實を劈裂して核を抉出し、之を烈火の上に置いて熱焼すれば核の外殻は自然焼盡して内部の凝結分子の黄色に焦げるを待ちて是を食ふ、其の味は頗る甘脆にして宛ながら薩摩芋を油揚にしたるもの丶如し、土人が之を嗜み之を以て三食の主となすこと恰も本邦人の米の飯と一般なりと。

南洋マルシャル島の土人も叉椰子實を以て常食となす、彼等は副食物として魚類を食ふなるが皆之をパンタナと稱する樹の葉に包みて炙き以て食ふ。其の炙法は恰も我邦の茅卷餅の如く魚肉を蕉葉に包みて火中に投ずれば火熱の透るに隨いて葉は宛も龜の甲の如き黒焦となる斯くして是を剝ぐ時は蕉葉中の魚肉は蒸したる鰹節の如くになり是を貯ふるに卅時間位は腐敗する患なしといふ、群島至る所に蒼蠅多きを以て如何なる食器も此の蠅の爲めに腐敗を來す事速かなれども此の蕉皮をつけしまゝに置く時は腐敗の患少くして自然貯藏の妙法とするものなりとぞ、土人は叉一種の糧食を製して貯藏するものあり是れは椰子の實の中にある芋

を砕きパンダチの實の汁と芭蕉の實とを以て甘味を附添へて食するなり、又麺麭菓の一種菓中に栗の實と同じき食味を有するものあり、此の實を取りて打碎し葛の一種に和して石臼に搗き充分搗碎きたるうへ之を團子のごとく圓め椰子の葉にて製したる徑三寸長さ二尺許ある袋やうのものを造り其の中へ入れ棒にて能く搗き固め口を封じ外部を繩にて巻〆め石の如く堅くし之を屋内に封鎖する事凡五六十日之を袋の小口より厚さ五分程の輪切となして食ふ、其の味ひ本邦の乾柿に似てよく渇を醫す、土人は之を攜帶の口糧として遠距離の旅行若しくは航海用として用ゆとなり。

南洋土人の多くは椰子の菓實のいまだ熟せざるを取り核内に含みたる水にて飲料を製す、一種のレモン水に砂糖を和したるが如く暑中の清涼劑として絶好の飲料なり。

南洋カロリナ群島の土人は海龜を以て常食とし、北米アラスカ土人は海豹及び、鼬屬の肉を以て常食となす、椰子樹が熱帶諸島にありて其の用法の區域の廣く効用の大なる其の核實は彼等の常食として米麥と用を同ふし、其の液汁は飲料を製すべく而して其の殼は薪材となり、其の樹幹は家屋船舶百般の器具を製るの用材となく、其の葉は以て蓆に作るべく以て帆を織るべく屋を葺くべく籃を造るべく、其の外皮は打つて毛氈類を作るべく其の樹の皮の纖維は以て綱を造るべきが如く、海豹、鯨が氷海地方にありて用法の廣き又同じからんとす。即ち其肉に食ふべく、其脂は焚くべく燈すべく、其の骨は器具を作るべく其の毛皮は衣るべきが如く、効用の廣くして且つ大なる一物に依つて萬用を辨く又自然の天惠といふべし。

大久保公家庭餘談

前號に於て大久保公の家庭につきて記する所ありしが

なほ漏れたるを餘談として錄す。

◎日曜の高輪邸　公が明治八年海外より歸朝さるゝや、何事も彼地の文物を世に施さむとを思はれそれにつきては自から實地に行ひ見むとされしが如し、高輪の今日の邸宅となれる地は、その折に購はれたるものにて地坪三萬坪、これに果樹栽培を試みられたり。櫻、桃、梨、林檎、葡萄、茶の種類多く栽培繁殖し、清洒せる日本館を建て馬車の往來路をつくり、此處を日曜の遊樂所と定められたり。彼の月曜日の晩餐終れば、公は一家族悉く相携へ馬車を驅りて此邸に赴き翌一日の日曜を必ず此に費す、庭内を散歩して庭丁に指揮するのみならず、自から手を下して葉の蟲を拂ひ樹の枝を剪るなど半は植木師となり、さてその最も好むところの圍碁に遊ぶ、碁の友には故岩倉(具視侯)德大寺(侍從長)故五代(友厚)及び重野(安繹博士)の諸家なり。家族はまた終日團欒の遊に樂しみてもて一日の快樂をうく、公は如何に忙はしき時も公けに止むを得ざる事なき限は、必ず日曜を家族のためおのれの遊樂のために高輪の邸に費すとを常とせるなり。まことに日曜をばよく用ひ得たりしとやいふべき。

◎愛好せるもの　は盆栽にして蘭、梅は最も好まれそれにつけて珍らしきものも求められしが多かりきといふ、犬と馬もまた好み愛するもの〻一なり骨董はさほどにはあらざりしが多少は好まれしといふ、道樂ともいふべきは圍碁なり、事は外にわたれど、松方伯が用事ありて來りし時、今日は日曜なりとて碁を圍みて座を起たず、家人等はあまりに長く松方伯を待たせて氣の毒の思ひせるとありきといふ、故中井櫻洲翁度々來り居り公の碁を圍む傍に坐りて、種々の冷笑、饒舌を言つては邪魔になるとあり、或時あまりに饒舌りて公の氣に逆らひたりけむ、公は烟草の火にて中井の手を燒きければ中井驚いてはたと話しを止めけるとありし

となむ。
公が家族のために、日曜を用ひて家庭の和樂にあてられしとは、まことにわれ人共に學ぶべき美しきとならずや、外にあたつて嚴霜烈日といはむやうなる威はありとも、内にはまた春風の如きあたゝかき愛情を家庭のうちにこむるこそ、まことに英雄の面目を認め得べけれ。公はまさに强かるべきところに强く、まさに柔和なるべきところ柔和なりし性格ありたりといふべし。

綠陰清風 (口繪參照)

行く春や紫さむる筑波山、その紫の霞とともに胡蝶の夢はさめはてゝ、花散り鶯去り、世は眼に青葉山時鳥の時とはなりぬ。

開ける花美しきを見て、のどけき春の心よりにほひ出でしとながめし心には、また散る花の風に亂れて行迹もしらぬ風情に、たゞあはれよと思ふは可し、あな口惜し長くも春をとゞめむなど欲ふはあながちなり。消るときを容して雪を觀、雫の月を思ひて夕立に逢ふべしと樂翁のいひけむ、まことに散るをばかくぞとゆるして花をも見るこそ、時に處して樂むとはいふべけれ、開く花に希望の心あり、散る花にも希望の心あり、美しく開き潔く散りてやがて果實はその梢にのぼりなむ。春暮れたりとて花消せたりとて鶯去にたりとて、時は常に長へに希望を人の心に置き人の眼にしめす、時に希望の光あり、希望の影あり、天然の花鳥草木は、長へに希望を人に與ふ、見よ花散りて青葉若葉の色うつくしき姿を風情を、中にも翠の陰滴らむばかりの若竹、今は古き衣をぬきかへて、新しきにかへつ、將來希望の生々せる狀態、如何にいさましくもさはやかなるよ。天然が人生に與ふる恩澤は、千本の筵の葉に置く露よりもなほさらに深くもしげし、天然がその若竹の竹の子を育つるとひとしく、人また人の子を育つる

にこの天然の深き心をさとらむには、如何ばかり胸ひろく思高く、愁も悲も嘆も折にふれてはあるべし、そを將來の希望の前に消して、たゞひたすらに希望に向はむとぞ願はしけれ。あゝ希望、希望。家庭の人の子よ、それ竹の子の希望ある風情を見て、おのれの希望に實をしめさむとすべし。

將來の千尋をたのむ竹の子は、
　生ひ出るよりいさましきかな。　伴　蒿蹊

昨日よりけふはよながき若竹に、
　かねて千ひろの陰も見えけり。　橘　千蔭

社會

乞食兒童の狀態（恐るべき感化）

嘉言善行の譚は何人も聞きて心地よく、惡しき情態は見るもいぶせく心地あしくはあれど、事によりては反省警戒のために知り置きて用あるものなり、社會問題かまびしき今の世には、養育院感化院孤兒院など公に私に設立の數漸く多く世の惡しき蹤に入る兒童を訓育して社會のためをはからむとするもの日に增すは喜ぶべきとなり、今われらは乞食童兒の恐るべき感化によりて終には惡しき社會の害物となるの狀態を記して家庭の圓滿なると否とが兒童の善惡に關係の深く大なると、敎化の與に忽ならぬとの例とすべし。

四月三十日の事なりき下谷警察署より十歲ばかりの迷兒を東京市養育院へ送りぬ、同院にては例の通り幼童

室に入れ、同室の保姆は之を院内の學校に行けよと命じたるに、學校へ行くは厭なりといふ、此院の規則として七歳以上ならば是非とも就學すべき筈なるゆへ、おとなしく行くべしと勸むれども中々聞き入れず、强いて勸むれば火を放けるぞといふに保姆は驚きて、火を放けるなぞとは何事ぞと問ひかへせば、さも得意氣におれは火を放けたとは幾度もあるから、無理をいへばすぐに放けてやるといひ放ちしより保姆はいよ〳〵驚き、この趣を事務所に申出でければ、やがて同院幹事安達憲忠氏は、かれを招き温やかにかれをなだめ菓子など與へて色々の事を問ひぬ。左の問答はそれなり熟讀して恐るべき感化の一端を知るべし。(〇は安達氏の問にして△は童兒の答なり)

〇お前は歳はいくつか△十です、〇名は何といふ△花村新六〇お父さんは何をし居るの△私が八ツの年に死だの〇お父さんの名は知てゐるか△知らない〇お母さんはあるか△死でしまつた〇兄さんや姉さんはないか△兄きはある姉さんもある〇何をしてゐるの△兄きは魚の腸を拾ふたり紙屑を拾ふたりしてゐる姉さんは本所の若宮町の紙屑屋へ雇まれて紙屑をよつたりぼろをよつたりしてゐる〇兄さんと姉さんの名や年は△名は知らない兄きは十八エー姉さんはモーづツと大きい〇お父さんやお母さんが死でからお前は何をしてゐた△方々を貰て歩てゐた兄きと一所に兄きがお貰をせんようになつてから一人で〇一人でさうしたの△色々の物を取て歩たの〇どんなものを△方々の菓子や下駄だの衣物だの〇澤山取れるかへ何が一番よく取れる△下駄だのお菓子だのが〇取りたものはどうする△親方に出して屑屋へ賣る〇寢るのは何處に△砂糖河岸に寢たりよその軒下に寢ます〇お前火を放けた事があるつてチー△放けました仲間のものと〇何處へ放けたの△本郷だの觀音樣だの吉原だの下谷だのへ放けました本郷のは兄きが放けたの〇下谷だの吉原だの觀音樣だのは皆お前がへ△へー〇觀音樣の火事はたしかひろいやなかつたか△方々で寢てしまつたから暗ひさき〇火を放けてどうするの△兄きだの親方だのがお錢を遣ろから火を放けろさいから〇火を放けるには何で放けるの△まつちさ油石油〇觀音樣へ放けた時はお前や兄きや親方は何處でみてゐた△親方や兄きが己ニア早く逃げろから早く放けて逃げて來いさいふたから放けてから逃げたの〇親方は何處にゐるの△伊勢町の砂糖河岸に紙屑拾ひの親方がある〇それが火を放けろさいふの〇へーそういふから放けるの〇本郷へ放けた時は兄き等さ一所にゐたか△私はどつかの裏へ隠れてゐて兄きや留が芝居の裏の方へ放けました〇留さは誰だ△上野でスリをしてゐた〇留

は年はいくつか△私よりも少し大きい○留とお前は友達だのか△へー留はチー深川のよういくいんにゐたと云ふてゐる○そうか深川のよういくいんに△へー、(因に記す此留といへるは放火犯として過般日本橋警察署の手に捕れたる惡少年のとならん乎) ○それで本郷へ火を放けた時分には何が取れた△其ときはガマクチとエー羽織と歴附の下駄と綿入とお錢とが取れたゞけ○お錢はいくら△銀貨が十と札が一枚○それは皆お前が取つたのか△イーエ兄きが取たの○外の者も取たのか△兄きや留は火事場の人のゐない處で取たの外の仲間はない○取たものは親方にいくら出すか△殘らず親方に出して親方からお錢を呉れる着物一枚に五錢位呉れる○吉原のはお前が放けたのか△へー放けたの○澤山取れたか△吉原の時はお巡りさんが廻りて居て取れなかつた○それじや放けたばかりでつまらなかつたじやないか△警部さんが五人とお巡りさんが大勢來て廻りて取ることが出來ない○觀音樣の火事には△お錢に一錢銅やら五厘銅やら是丈け取れたと (時に指十本出せり其の意味を考ふるに彼の數へ得られぬ數には指を殘らず出すものゝ如し) ○どんな處で取たの△錢箱の燒けたのを消して車にのつけて遠方へ行くから跡から縋て行て荷をおろして人が外へいつたから其中のを取たの○お札もあつたか△イーエない○親方は年はいくつか△モーづッと大きい○親方は一人だけか△二人ゐる○アゝおかみさんもあるのか△ウム紙屑拾ひの仲間おかみさんじやアない○取たお錢を親方になぜ出す△ひどい目に逢ふから皆出してそれから分けて貰ふの○髮をつむのはどうする△方々に髮結が出てゐるでせうあれにお錢を出してすつてもらふ一錢銅をこれ丈出すと剃て呉れるとて(指四本を出せり)○下谷ではよほど取れたか△(指十本出して)是丈お錢が取れた着物も十も取れた (此指十本も十といふ數も澤山との意味にて彼の數へ得ぬ數の如く思はる) ○取たものはどうして持て行くか△籠の中へ入れて持て行く兄きが○下谷の火もお前が放けたのか△イーエそれは私の運が放けたの○いくつ位△丁度私とおない年十です○何といふな△豆ちびといふのです○お前は人が何と呼ぶ△ちび〳〵と云ふの○赤島といふお前位なので淺草公園に居たのを知てゐるか△知らない私はおもに吉原にゐたから公園に行くとお巡りさんがつかまへるから行かぬ○お前方はあんばいの惡ひ時はどうする△寢て居るホラ上野の段々の下に穴があるだろふあの中にござが敷てあるそれへむぐつて寢て居るの○お前などはどうするか△たゞ寢て居るばかり○たべるものは△貰てためて置く少しづゝ使かつてためておく○火を放けて捕まつた事はないか△捕まつた事はない豆ちびが一度捕まつたぎり○砂糖河岸に職人居るどの邊か△エ○十人ゐるが伊勢町の砂糖を搗る處に橋があるだろう藏へはゐる所にチー橋があそこに大勢で夜になると寢るの○其うちで一番大きいのは△兄きや親方が一番大きい私が一番小さい○兄きの名は△兄きの名は親方〳〵といふの○外の者の名を皆いふて御覽△私がチビでそれから豆チビ親方チンコロアザナマアそんなの○火を幾度つけだ數を聞かしておくれ△柳盛座もつけたし吉原に本郷に淺草に下谷

にまだこんなにつけたさ(指十本出せり)

吉原に淺草に本郷に下谷に、まことにこの十歲の幼童の手にて幾百千の人家財產は一朝烏有の災を蒙り、生命を危うせるものもありたるを思へば、慄然として恐るべく驚くべきにあらずや、かれも人の子なり、いかで生れながらにしてかゝる大惡をなすものならむ、今にしてなほ眞にその大惡なるを自から知らざるなり、たゞかくおのれは爲すものとやうに感ぜるものゝ如きは實に憐むべきものならずや、その家庭を見るに父は八ツの時に死し母も無しといふ、下等社會の敎育なき惡境にあるゆへにとはいひながら、父無き母なきによれると、その惡に陷るの感化に力ありといふべし、此の幼童につきてなほ左の事實を思ひ出せり。

同じ發育院の安達氏が成瀨生龜太郎といふ十一歲の童見になせる問答にて左の如し、

○お前の國は何處△參州です○參州の何さいふ處△知らない○お父さんは如何した○お父さんは幼さい時死ました○お母さんは△お母さんは參州に居ます○お父さんの名は△萬五郎さいひます○お母さんは△お母の名はおシンさいひます○家は何なして居た△家は百姓でした○今はお父さんはないか△私の七ッの時あさのお父さんが家へ來た○名は△兼さいつた○お前は兄弟はあるか△兄弟三人ある私さ四人○姉さんか兄さんか△姉が二人で弟が一人○姉さんは家に居るか△姉は二人共郡內へ奉公にいつて居ます○何して△蠶の糸取りに○姉さんの年は何歲が△十五さ十三○弟は△弟は家に居る七ッになる○お前は東京へ如何して來た△お父さんさ私しは一昨年東京に來た○何なして△土方をして居た○何處で土方をして居た△牛込ステンショの側で去年までして居た○お父さんは如何した△それからお父さんは逃げて仕舞つて○それからお前は如何して△私は乞食をして居た○いつまで△昨日まで○何處の邊で△新橋の邊で○夜ろは如何した△新橋の馬車小屋で寐て居た○何故此處へ來た△連の一人が人の下駄を盜んで三人で步行て居たら探偵に捕まつて二人は逃げたの、私は何もしないの○夫れから△京橋警察署へ連れて行かれて又其所から區役所へ行き區役所から此處へ來た○此所は善いか△此處に居るのは嫌だ逃げて乞食をして居たい貰つて步いて居た方が善いから○お前は何故乞食になつた△だつてお父さんが逃げて仕舞つて親方の家に置いて吳れないから○何處の親方の家に居たの△牛込の土方の親方の家にお父さんさ居たの○何さいふ名だ△知らない○何時から乞食をして居た△もう一年から○仲間が

あつたか△ごつさり有よ○お前の知つて居るのを皆いふて御覽△知つて居るなあ百人もあらあ本當の己の仲間は六人かない○六人の名ないつて御覽又皆の名と年を聞かしてお呉れお菓子をやるから（爰にて菓子數個を遣す）△大きなのがチヤキといふて二十位、其次が常公で十三か十四、十藏が十三、土橋か十二、デコチンが十一、桶屋が九ツそれだけ○それで親方はないの△わたい達はないの、外の者は皆親方がある萬年町に婆ヤといふ親方がある東京一番の乞食の親方だ○婆ヤさは女か△あゝ女だ○親方があると如何する△親方へ毎日二錢づゝ出す○それは親方の家に宿つたり食べたりするからだろう△左樣ぢやあないの泊らないでもだよ○どうして出す△歩を取る者が廻つて來るからそれへ遣る○皆乞食ばかりするか△大きな者は泥棒ばかりするけどもわたい等は乞食をする○何といふのが泥棒をする△澤山あらあ一番上手なのがズンドされい書生といふの○其ズンド書生は何歳位△ズンドか二十書生も二十位、新吾といふのは懲役に行つて脊チビも懲役にいつた○新吾と脊チビは何歳△新吾は二十二三、脊チビは死んだ○縣チビも泥棒か△あゝ皆泥棒、それから赤島たのチビだのいふのは淺草公園に居らあ六ツ七ツ位○夫れは泥棒ぢやあるまい△そんな少さいのはな貰ひばかり又大きなはれい熊口といふ着物を婆やの方から着せて呉れて俺を貸して呉れるそして歩くさを巡りさんが捕まへぬそで泥棒をするんだよ○何を取る△何んても取るけれどもまあ下駄だの雪駄だの靴だの盗で歩くをしめでも取らあ○お前も少しは泥棒をしたか△わたい達はまだ少さいから取らない○學校へ上つたことはないか△上らない

以上の問答によるときは龜太郎は已に放縱なる乞食の境遇に安んじて却つて規律ある養育院を厭ふのみならずまさに悪しき境遇に陷ちんとせるところのものなりしを見るべし。龜太郎の所謂チビといふは前條の花村新六なるとも明らかなり、龜太郎また父を失ひ後繼父に捨てられしよりかくは乞兒となりしことも明かなり、家庭の圓滿と圓滿ならぬとは富めると貧しきとに拘らず、兒童に深く大なる影響感化を及ぼすと此に就てよく見らる、人の子の成育を重んずべきと、家庭の實に大切なると等此邊にてよく學ぶべきを思ふ。進んでかくの如きあはれなる幼童を罪悪より救ひあげる道を講ずるはまだ婦人の一事業ならむかし、われらは婦人矯風會婦人會の此方面に注意せむとを切に望む。

燐寸の箱張（家庭事業の二）

燐寸の箱張りも、亦これ大ひなる内職の一つにして、其手廣くも擴がれること、殆んど煙草巻きの廣きに劣らず、思ひ見よ數限りなき多くの人家、燐寸を用せざるもの何處にかある、况んや遠き國々にまで、其輸出さるゝ數の、是れ亦少なきにあらず、宜なり其の需要、漸々少なきが如くに見へて、却つて甚だ多きこと。

我嘗て文政の頃の或隨筆を讀みしに、中に面白き事を見出しぬ、曰はく、

江戸において使ふ處の附木の數を一年に積り數ふ時には逞しき馬百八十四にて引くに餘まると昭代の餘光は誠とにや此一事にても知らるべきなりアナかしこ誠とに盛んなる限りにこそ

ど、中にある附木とは、知り給ふべし、俗にツケキッパとて、硫黄の花つけたるヘギにして、いはゞ昔の燐寸、古き家にては猶用ゐつゝあるものあり。

さて右にいへる隨筆の文句、著者は何等の上よりして然かく打算なせしや知らず萬づ今の如くに綿密ならざる時のことゝて、嘸かしな違算もあらん、よし左らずとも、盛を驕る一種の氣風、蓋し誇張せる意も或はあるべし。けれど一概に捨つべきにあらざるなり、誠とに其中にいへるが如く、昭代の餘光實にそれにても察すべく、唯あきるゝの外はあらず、况んや年移り時進みて、繁昌いやが上に愈々繁昌して、人口增し戸數殖えける今の時、この附木に代へて用ゐらるゝ燐寸の數は如何に多かるべき。

然して其數多き燐寸の小箱は、總べて彼の巻煙草と變はれることなく、下層社會の女ども、留守まもる人々初じめ、老人などの仕事として、片隅欠けたる火鉢の側ら、或は煤びたる障子にうつる日向やゝ暖き、椽先などにおいて作らる。

これにも亦、其わざの難きもの、容易なるもの手別すれ

ば様〻あり、仕上けとて小箱を充分に張り上げると、是は相當の熟練を要せば、巻煙草を指込むこと〻同様に、尤も手馴れたる者がなすべく、その出來上りたるものを、或は十つ〻二十つ〻、數改ためて一つに纒める、又は其心とするヘギを筋目によつて折ることなどは、手助けに子供或は老人がすべし、その如く初めたやすき所より、追〻と日數經て上手になれば、遂ひに其仕上げをも、張り上げをも、充分になすに到らんこと、左程まで難きことにもあらざれば、多くの月日を積まずともよし。

其初め問屋より、紙とヘギとを與へられたるを兎も角も小さなる箱に仕上げて、これを其用に立様にする、たとへば麻裏の裏を編む如く、又は繃帶をほどすが如くに、容易極まるといふにはあらねど、去りとて左程六つヶ敷きことにあらず、もし巻煙草まきなぞに比らべ見れば、幾分か却つて容易なるべし、况んや石盤繪の彩色などに比してをや、誠とに數等のたやすさを感ずなるべし。試みに思ひ見よ、其材料として用ふるヘギには、方寸一〻刻みなされ、紙は又其形に合はして切られたるもののゆゑたゞ〳〵其切つけられたる筋の如くに、ヘギ一〻を折り曲げて、それにこの紙を張りつけるだけのことなり、然して其の仕事に取か〻る前、さて何程の用意を要すか、それもまた頗る簡單にて、巻煙草まきよりは猶やすし、即ち彼れにありては、前號にいひしが如く、様〻と太き細き、管なんど一〻買調へざるべからずといへども、これにありてはさるもの實に一つも要せず、唯小さなる刷毛一本と、張箱の一つ二つ、これは又彼煙草入る〻箱と等しく、蜜柑箱の古にてもよし、それだけにあれば充分にして、其他には片茶碗片壺の一つもあれば事皆足る、誠とに手輕きものにして、其材料として問屋より請取りし外、薄糊の少〻だにあれば、跡は皆手一つにて成し得べきな

り。
事左程に容易なるまゝに、仕手おのつから多くして賃錢なども、大ひに安きは仕方なきことゝいふべし、小箱の數、一千を然かく形に仕上げて、僅かに十二三錢といふ小量なれども、怠らで勤むる時には、朝早くより夜業をかけ、二千近くを仕上ぐさへあり、まづ大抵の手並、左程に上手といふにあらぬも、千二三百を仕上ぐやにいふ、よし然かく多からずとも、日毎ゝになし續けんか、小さなる裏屋などに住みなせる身の、屋賃位は、僅かにこれによりて得らるべきなり、實に誠と世に勤むるといふこと程、結構極まれることはあらざるぞかし。
例の餘徳といひなして、賃錢以外に得るところのもの、煙草の吸料などいふが如くに、大ひなるもの、玆にはあることとなし、さりとても亦滿更に皆無ともいふ譯にはあらず、ヘギの屑は以て粥を煮るタキ附けとすべく、紙の餘りは以て樣々のツクロヒなどに用ふべき、これ又この事の上より見ては、小さしといふにはあらず。

（中野其村）

◎婦人貯蓄會　備前邑久郡豐村大字滾にあり、二十七年十一月の創立にて會員は五十歳以下十七歳までの品行方正の婦女を限り毎月二十一日夜を會日と定め會費五十錢、銀行に預け本年三月までの總計八百七十三圓二十錢に達せりといふ。千圓に滿つるをまちてその利金を以て私立裁縫校を設立すべしと美擧といふべし。

◎與の女敎師　芝西久保巴町市立鞆繪小學に數年來本職の女敎師茨城縣人大久保梅子、受持の生徒を視るとさながら實の子の如く生徒の懷き親むと親の如し、さる日都合のため辭職せるに、生徒の驚き大方ならず皆敎師の宿所につめかけ留任をと請ひけるが事情止み難く、別るゝ時生徒中には大聲出して泣くもの多かりしと。敎師と生徒はかくありたし。

寄書

在京の愛女彌知を戒むる書

越後　田舍漢

彌知の祖先は、田舍の豪族にして、豐臣公より前田を其國へ遣るから宜く加勢を賴むと云はれたる智勇の人にして・時勢の推移、自然其藩に仕へざるを得ざるに至りたれども、倘代々の人持格を失はず、一小地方の門閥にてありき、年月を經て今は僅に一鑛山長を以て、貧き生計をなし、望なきに非れども事意と副はず、之を祖先が一家を起し代々相繼ぎたるに比せば耻しき次第なり、世は進運に喜べども我は退歩せしと思に滿たず、さりながら精神にして堅忍一致心を合せ努めたらんには、倍舊の成功疑なきは自ら信ずる而已ならず、古今の例に徵して明かなり、只世間多く失敗せるものは中途或は安んじ、或は落魄等、堅忍不抜の精神なきに因らざるはなし」教育を怠るの國家は、衰運を招く、我家にして教育を怠らんか、衰退は言を俟たず、御身は幸に家庭に於ては、都會惰弱の風を受けず、幼稚園の保育を經て、今日に及び、天稟怜悧にして而も堅忍、御身此心を以て學はゞ、異日我が望の一を充たしむを期すべしと確信し、這般一家團欒の愛樂を裂き、御身の母と叔母を附かしめ、遠く東都に出す事となれり、御身は合格せり通學せり、五十名の募集に應募百數十ありし時の父が懸念は晄れたり、去れども一苦去れば又一苦、父が田舍心に憂るもの一にして足らず、今其一二を掲けば、

過日入學受驗者扣處と張札あるに付、御身をも其中へ入れんと伴れしに、計らざりき、田舍者たる父の眼には半玉藝者らしき女の人百數十を以て滿たされたり、中には翩々胡蝶の舞ふか如き、或は綾羅の袖裡客に秋

波を送るに似たるあり、不審さの餘り何時しか是が生徒かと呟きしは、御身も知る處なり、華美は文明に伴ふとかや、されど外裝虚飾は藝者に而己と思ひしに然らざる方にも其必要あるにや、入學試驗濟みて父は彼處此處の學校內、衣紋共進會を見物して歸れり、其後御身は田舍者百姓と嘲らるゝを聞けり、入學試驗にこそ合格したらめ、藝者的衣服姿容の飾には落第せる御身斯く云はるゝも理なり。

されど父が御身に願ふの第一は、其田舍的百姓風を脫せざる事なり、御身は都風に犯されし義仲か粟津原に戰敗せし父が譚を忘れざるべし、百姓ならざればコロンウヱルたる能はずと母に聞きしなるべし、革命改造の遂行者は多く田舍者たるの事實は、漸く學ぶ歷史の上にて知るならん、御身が今居る東京の貴顯縉紳は其一二を除きて他は悉く田舍者たるを知らば、我家の再興又苟も世を益せんとならば假令人が何と云ふとも田舍者たるの寧ろ資格と云ふものを失はざらん事を希ふなり、必ず都風優雅の名の下に華美を好み惰弱に染む勿れ、都の人は外見立派なり、されど堅忍の心に乏し、都より他に善き處なしと思ふが故に滿足し、比較的階級秩序定まるが故に、其を破りて立身せん事易からざるを口述に、早や多く落魄す、都は生活に冗費嵩み今日に追はるゝが故に、心に餘裕なく齷齪一世を終るもの多し。

田舍者は自己の位地能力を計る尺度を持たざるゆへ草莽より一躍顯位に上るべしと自認する好漢を產む、また人は無限の發達力を有す、好漢都に出て自巳の理想を得されは安んぜず、健强の軀躰と執着の心は、容易く落魄せず、加ふるに生活に冗費を要せざるは田舍者に於て初て求むべし、眞性立身の要素が、田舍漢に多しとせば、都人却て田舍者を學んで可なるべきに、御身を目して田舍者百姓漢と蔑むはそも何の心ぞや、御

身よ前途悠遠それ省よや、

御身は田舎者丈けに躰健に堅忍なり、されど都には清浄の空氣なく安價新鮮の魚を需め易からず、病毒は多く、また其毒に觸るゝ機會多し、加るに父が眼には都は衛生法割合に行届かぬを感ぜり、されど田舎には學ぶ處なきが故に、學問のためにのみ誘惑と不衛生の都に出でざるべからず、御身よ學ぶと同時に都會の弱點を避けよ。

又政一郎を幼稚園に入れんと思へども子守共の振舞等を見、今は不完全ながら家庭に於て保育せんと思ふ、幸に母は略其道を知るが故に、大なる間違もなからんと思ふ、さりながら彼の遊び友は年長けたる多く、力らも超して彼を抑ふ、斯ては屈從的慣習に陥らんを恐るゝなり。

東京は雨天に往來歩み悪く、多くの生徒車を用ふ、御身は田舎者なり、都人に倣ふ勿れ。

大抵の田舎者は東京の繁華を云ふ、されど東京は日本の主府としては欠點多き都ならずや、御身は父と共に東京をも改造せんと思ふ心は起らざるや、女故に父と方面を異にしつらんも、御身に適ふ事柄は、擧げて數ふべからず。

父が過日御身の女教師に遭ひ、其幾人か理想の豊富なるに敬服せり、且都風誘惑の中に在りて確固定見を失はず、御身を托するに足ると安心すべきを喜べり、給料に生活する教師にては非りき。

終に臨み田舎飛出しの例として、糖分多き都料理と、白餡の餅菓子や、しるこ等三食の外に何くれと喫べ、胃を害ひ運動を欠き、以て東京名物の脚氣に罹ることあり、されば食物は腹八分に醫者入らず、母と叔母等と共に運動を欠さず自重せよ猶申度山々なれど父も事に忙しく書外重々可申候也

記者附記　此はその愛女に與へたる一私書を寄せら

れしものなるが、家門の聲譽位地を重ずると、摯實堅忍虚を去て實を取ると、女子とても確固の志を以て男子にも劣るまじき心掛あるを要すると等の教訓の美なるを認むべし。世のその女子に教育を施さんとする父兄、家庭の上に淺からぬ益あるべきものなり。田舍と都とを比べたるなど今はなか〳〵に田舍も浮きたるが少からねど、かくぞと信ぜんは大なる志の根基なるべし、かほどに堅き志もたば男子なりとて成功はいと易し、況してや女子が此心をもて世に處し教に從ひ行なむには、將來の希望必ず達せらるべし「田舍ものたる父の眼には半玉藝者らしき女の人百數十」とあるは今の女子の風俗が華美にながれたるを酷くも評せるもの、象山の女訓にいへる「衣物の仕立夏冬によらず念を入るべし、……模樣も色も隨分花やかにてしかも尋常なるよろし、はやりに從ふはいやしきなり、殊に俳優、舞子などのしだしたらむをば、いかに人はもてはやすとも、おのれの身にはあるまじきとにおぼして着たまふべからず。すべておとなしく位あるやうに裁てらるべし」とあるを思ひあはすべく、今の風俗は尋常を越えたりといふべし。「御身も父と共に東京をも改造せんと思ふ心は起らさるや」、と此語まことによく女子の世に立ちて唯女々しからむより一段の志を抱くべきとを言ひ得て可し。「腹八分に醫者入らず」とは味ふべき衛生法にあらずや。われらはこの浮きたる風俗のなべての社會にわたれる折柄、かゝる實情誠意の書に接したるを歡ぶ。今の世は何事も文をさきにして質を後にす、否、文のみに心して質に思ひ及ばぬが弊なり、この書よくその弊を言ひ得たりといふべし。なほかゝる眞摯誠實なる書の多く寄せられんとを江湖の讀者に望む。

草　紙

信濃　木内翠蔭生

吾が子當年三才になりけるが、時に筆取り出して書物の表紙や、障子、襖の嫌ひなく亂書せんとし、これを止むれども中々聞ず、あるとき白紙にて草紙樣のものを綴り、之れに書くべきものなる事を敎へしかば、其後筆取り出しても、其草紙ならでは書かずなりぬ、何事も初めの習慣次第なるべし。

記者曰く規律は此邊にてあるべし

思ひでのまゝ

北但　天涯生

人には好奇あり美味佳肴口に適ふとは言へ、蓼食ふ蟲も數奇々々にて豫想外に嗜好するものあり、予が性豆を好む、煎豆は金米糖の代用となすべく、煮豆は晩餐の好下物、豆汁は麥飯の好適子、分けて靑豌豆は莢なから煎て用ゆれは、上品にして好味なり、又之を飯に混じて炊けば其風味や言ふべからず、予の最も好む所は飯と汁なり、一休禪師の歌にも「一代の守り本尊たつぬれば吾人共に飯と汁なり」とあるが如く、予の一生は此の二物に飽き足らば、充分なり、滿足なり、去月歸省の際予の最も尊敬せる老祖母の調へ玉ひし未熟の靑豌豆の飯は、好意にも淚のこぼるゝ程難有く思ひき、されど豌豆はなほみのらず、丁度花盛りの折なりければ如何とも詮なしと喞たれしが、今や下宿屋の主人は豌豆の飯に豆の菜もて、晩餐に供せられ偶回想の念勃々として起り物をも言はでいと嬉れしく數椀を傾けしが夜も更けぬるに從ひし黃粱一椀の夢いつしか故郷に漂ひて祖母君の傍にあり、父母の物語りを聞き、えも言はれぬ心地せしと思ひしに、汽笛一聲耳朶に徹して曉を報じぬ、心苦しく胸動きてせはしかりき時は明治二十九年夏の初めつ方にて今や紅紫漸く褪せて

夏草の萠も玄鳥の舞飛へる麥隴中、蛺狀の花瓣片々と小蝶を誘ふ樣を瞥見つ、鍬とるわれは懷舊の情禁へがたし。春風駘蕩綠樹新草萠え出てゝ花は紅に柳は綠彌生の天は過きたれど草には芹三葉嫁菜などありて乙女子の手籠の中に摘みとられて家族の膳に上り、副食となるもの多し、樹木に至りては獨り木の芽と通稱せられて稱美せらるゝ山椒の樹の芽ありて木の芽田樂木の葉酢飯木の芽味噌等ありて香氣ありて風味を添ゆ今木芽田樂の事を少しかき記さん木の芽田樂とは豆腐を細長き形に切り竹串にさし砂糖味噌に木の芽をきよくすり混ぜしものを豆腐につけて燒くなり花見遊山によろしく又家族團欒を買ふの馳走には殊によろし、店に求むるよりは自家に勞して作りしもの一層の快味の存するものなり。

新刊紹介

詠歌之栞　下田歌子著

家庭文庫の第三編なり、初に歌學に就きての心得を述べ、歌の起源、沿革、撰集、歌の種類を說き次に將來の國歌新に起るべき理由につきて今樣の躰を可とすると漢語洋語の用方に及ぶ、以下文法歌會の式、書式、歌の奬勵方、詠歌に就きての心得（精神、組織、姿勢、材料、題林、書賛、詞書作例等）あり、鼇頭には題林詞林名所果物作例を集錄す、まづは整へる詠歌の栞なり。（價三十五錢日本橋本町博文館發行）

花波さくら　生田目經德著

櫻花各種の名稱歷朝賞花の故事詩歌各所名物種類等を集め錄せるものにて詩歌文章などの資料に供し興味と益とあり（價十五錢芝三田福島書店發行）



社告

寄書募集

左の條項に據りて寄稿を歡迎す

一地方風俗習慣上につきての所見若しくは所感
一其地方に於ける時々の見聞錄
一家庭に關する自他の經驗談若くは見聞記事
一兒童遊戲の種類
一家庭日記の類
一童謠俚歌

總じて事實上の記事たるべし、文章は短きを可とす、

大日本女學會

總裁小松宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方九十四名

趣旨

本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期すされば此講義錄は學ぶべきよすがなき者の師友となり一家の主婦として、齊家保育の任に當る者の指針となり女學校に入學し居る者にも參考として適當なり●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を増設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に

會員を募集す

志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第壹卷より送本差支なし●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下の叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に一答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月三十錢束修三十錢●會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ

學科及び講師

●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたるものに係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師

附錄

●史叢、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

●目下第七卷迄發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地　大日本女學會

（明治廿五年十月十四日遞信省認可）（明治卅一年五月十五日發兌）
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行